
空の落書き

綾瀬メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の落書き

【コード】

N0973Y

【作者名】

綾瀬メグ

【あらすじ】

彼女の恋人は、彼女がこの世界で一番苦手なもの。結ばれるはずのない二人を繋ぐものは、あの日の約束と偽物の空。

”ゆるめに切ない恋物語” 目指して執筆中です。

特に新一の設定はパラレルですのでご了承ください。

1 (彼女の秘密)

『世界で一番嫌いな物は？』

その質問には迷わず答える。

「お化けとか幽霊です。」

そんな物存在しないのに、と笑い飛ばす人は必ず居ると思う。
それは怖いよね、と身震いしながら同意する人も必ず居る。

だけど、私の本当の気持ちは誰にも理解出来ない。
どうせ信じてくれないから、誰にも話した事もない。

この世界中で誰も知らない、私だけの秘密。

空そらの落書き

世の中には数え切れない程の怖い話や怪談が存在する。

学校の七不思議や禁じられた遊び。

この話を聞いたなら　しない駄目だとか、何人に話さないと呪われるだとか。

それらは大抵、子供の頃は怖くて眠れなくなったりして、大人になれば自然と忘れていくもの。

私が住んでいる街、米花町にも隠れた心霊スポットがある。

駅から数分歩いた2丁目、21番地。

住宅街に突如現れる古びた大きな洋館。

周りの景色とは全く似合わない、違和感だらけの異様な存在感のそれは、何年も前から誰も住んで居ないせいで雑草が生い茂り、立派な門は錆び付いている。

子供達には有名過ぎる噂。

上から2段目・さらに左から4番目の窓…

満月の晩には、無人の筈のそこに人影が映り込む。

その姿を見た者は洋館に引きずり込まれ、二度と朝を迎える事は叶わない…

そんなよくある怪談話。

「…それがこの”エトー”の幽霊屋敷なんだってよ！」

「元太君…これは”エトー”じゃなくて”クドウ”って読むんですよ？」

「うっせーな！んなモン何でもいいじゃんかよ！」

今日もランドセルを背負った小さな子供達が、”心霊スポット”の前で怯えていた。

決して珍しい光景ではなくて、むしろ日常。

私はその度に思う。

ここの『幽霊』が本当に誰かを拐って返さないのだとしたら、むしろ大歓迎。

『彼』と一緒に居られるなら、この世界の何もかもを失ったって後悔しないのに…とか、大作ラブロマンス映画さながらの台詞も心から言える、と。

子供達が去った後、私は当たり前前の様に『幽霊屋敷』へと足を踏み入れる。

その行動は決してホラー好きの好奇心なんかじゃない。
むしろ私はその手の類が大の苦手で、知り合いが今の私を見たら驚愕すると思う。

それでも、これが私の毎日の日課。

この屋敷には実はきちんと持ち主が居て、それが世界的有名な推理小説家であることを知っている人はほとんど居ない。
室内は定期的に掃除されて外見からは想像出来ないほど綺麗だし、電気や水道といったライフラインだって途絶えていない。

無人であること以外は普通の住居なのだ。

広い廊下を抜け、アンティーク調の手擦りが施された階段を上った、2階の端から2番目。

子供達が噂する窓がある部屋。私は一直線にそこに向かった。

その部屋は壁一面が本棚になった、『彼』お気に入りの場所。

読書好きの『彼』は、私が全く理解出来ない様な難しい書籍を四六時中読んでいる。

中でもお気に入りには推理小説だった。

机の上に開いたそれが置きっぱなしなところを見ると、今日も此処に居るはず。

「…あれ？」

…なのに誰も居ない。

「おかしいなあ…どこ行っちゃったんだろ？」

しん、と静まり返った室内で自分の声がやけに響く。

分厚い窓ガラスで外の音はほとんど聞こえない。

もうすぐ夕暮れ。

窓から差し込む陽の光が、斜めに長く影をつくる。

一人だけ異世界にぽつん、と取り残された気がした。

”居なくなるなんて有り得ない”と言い聞かせても、不安は消えない。

「まさか、ね。」

部屋の隅にある大きな鏡が目に入り、映る自分の姿を見て軽く一回転してみた。

去年までのセーラー服と違うブレザーの制服は、何だか少し大人になった気がして。

「”新一に見せたかったのになー”」

「…うん。」

「可愛いつて言って欲しかった？」

「…うん。」

「ちょっとスカート短過ぎるんじゃないの？」

「……………は？」

振り返ると『彼』が私の足元で屈んでいる。

「ばっ…ばかつ！変態っ！！」

どこ見てんのよっ？！」

私は反射的にスカートを押さえながら蹴りかかった。

けらけら笑いながら『彼』はそれをすらりと交わすと、目の前の机に腰かける。

「オメーが此処に入るの見えたから、驚かしてやろうと思ってさ。」

「もう…急に現れるの止めてよね。心臓に悪いじゃない！」

「別に良いだろ？それはオレの特権なんだから。」

フワフワしてて掴み所の無い彼は、まるで小さな悪戯っ子だ。それでも彼の顔を見て安心しきってる自分に呆れる。

「どーしたんだよ？んな浮かねー顔して。」

「…居なくなっちゃったかと思った。」

「ずっと居たって。」約束”しただろ？”

”約束”…。

頭では理解していても、彼が破るはずないと分かっているにもかかわらず、私の不安は消えない。

こんなに不確かなものが他にあるだろうか。

…そんな私の気持ちを他所に、彼は笑顔で続ける。

「で、入学式どうだった？」

「今年も園子と同じクラスになったよ。」

「そっか、良かったな。」

”貴方も一緒だったらもつと良かったのに。”

浮かんだその言葉を押し込め、俯いた。

言うだけ虚しいのは自分が一番良く分かってる。一緒の高校の制服を着て、同じ高校に通いたい…その願いは絶対に叶わない。

彼一人だけ残して私だけ歩き続けている罪悪感も、無理矢理考えない様にしてきた。

でも、きっと彼が高校生だったら…

「なあ、蘭。もしかしてコレ？」

顔を上げると、彼が笑顔で私の顔を覗き込んでいる。

数秒前との異変。

それに思わず見とれて、顔が熱くなってしまった。

「…なによ、その格好。」

「オレの制服姿が見てみたいって顔に書いてあったから。」

「そ、そんな事思ったわけないでしょ?!」

「あ、そ。でも結構似合うだろ？」

いつの間にか制服姿の彼は、帝丹高のパンフレットを片手にヒラヒラさせて微笑んだ。

さっきまで思いつきり部屋着のラフな格好だっただけに、何だかどきどきする。

言葉にこそしなくても、彼は隠したつもりの私の心を読んでしまう。私に分り易過ぎるんだ、と彼は言うけど。

本当は入学式の最中、男子生徒を見て何度も思った。彼ならきつと似合いそうだなって。

それを読まれたのは悔しい。
…けど、やっぱりカッコ良い。

こんな人が居たら、絶対女子生徒の注目の的だと思う。
想像してみたら嬉しいけど…
ヤキモチばっかで疲れそうだな。

なんか複雑。

そんな妄想ばかりしていたら、彼と目が合った。

「な、なによ？」

「いや。逢った時はあんなにガキだったのに、早えーなって…」

「そつだね。もう10年くらい経つもんね。」

「…さすがに今までみたいには此処に来られなくなるんじゃないかねえの？」

彼が私の思考を見抜くのが得意なように、私にも特技があった。

それは不器用なその言葉から、彼の真意を汲み取ること。

強がり、いつも笑って、絶対に泣かない彼は本当の気持ちを中々言葉にしない。

だからいつだって、気づかない振りをして。

「今まで通り毎日来るよ？新一が嫌だって言ってもね。

”約束”したじゃない？」

私達が出会ったのは、小学校よりもっと小さな頃。

あの時からずっと親友で、幼馴染みで…初恋の人である新一と、いくつかの”約束”を交わした。

幼い自分達にとっては、何より強い絆で。

大人になった今でも、もちろん変わりはない。

でも私が中学生、高校生と成長していくにつれて、新一が迷い始めたのも知っている。

そんな事、考えて欲しくないのに。

「まあ、蘭がそう言うならいいけど。」

「うん。」

本当は不安だ。

いつか新一は、私から離れようとするかもしれない。

黙って私の前から消えてしまいかもしれない。

”約束”から私を解放する為に。

少しでも考えてしまつとどうしようもなくて、彼を軽く睨んだ。

…きっと今の私は、駄々をこねる小さな子供みたいな表情をしている。

「蘭？」

「……………」

黙ったまま両手を彼に向かって伸ばすと、新一は呆れた顔で、でも少し嬉しそうに微笑んで。

私の腕を引き寄せて、優しく抱きしめてくれる。

男の子の癖に華奢な体。

肌や髪、唇の感触は間違いなく感じるのに。

たったひとつだけ、たりない。

出逢った時からずっと。

彼の左胸からは、何の音も聞こえない。

私が恋した、この世界で一番大好きなひと。

それは私が”この世界で一番嫌いなもの”だった。

2 (彼の特技)

「なんでもいってよ。わたしがかなえてあげるから。」

子供だったから。

魔法だって使えると信じていたから、無邪気に言葉にした。

彼の一番の願いは叶えてあげられないのに。

残酷だった。

でも、その時彼が口にした願いはとても些細なもので、少し悲しそうな笑顔で呟いた。

「…そら、をみてみたい。」

「そら？そらなら、どこからでもみえるよ？」

もう少し後になって、知った。

彼が見ていられる空は、窓枠に仕切られた四角い空だったこと。私達が当たり前に見ている果てのない空を、彼は知らなかった。

2 (彼の特技)

「あれ？何かあったのかなあ？」

放課後、私は新一の元へと向かっていた。

彼の家が近づくにつれ、いつもと様子が違うことに気がつき、立ち止まる。

何だか辺りが騒がしい。

数台のパトカーや、刑事らしき人物。取材しているアナウンサーとカメラまで居る。

その周りを囲むように、大勢の見物人が騒然としていた。

一瞬『幽霊屋敷』の方かと不安が過る。

背伸びしながら覗き込むと、どうやら彼等が出入りしているのは隣の家だ。

(事件、かな?こんな身近で起こるなんて…)

…でもそれよりも、私が考えなくちゃいけないのは別の事。
早く新一に会いたくて走ってきたのに、これだけ人が多いと彼の家
へ入れない。

無人のはずの『幽霊屋敷』に女子高生が出入りしているなんて、不
審がられて変な噂でも立てられたら後々面倒になる。

(仕方ないな。)

表門から大きく迂回すると、人影の無い細い路地。
騒然としている向こう側が嘘みたいに静まり返っている。

(…誰も見てないし、いいよね。)

裏側まで立派なこの屋敷の柵は、一部だけ老朽化している箇所があ
った。

子供の頃、よくそこから潜り抜けて中へ入って事を思い出したのだ。

…さすがに今は上から乗り越えるしかないんだけど。

こんな事していると不法侵入してるみたい、と自分でも思ってしまう。

「あなた、何してるの?」

「…へ？」

最悪なタイミング。

今まさに柵に両腕をかけた瞬間、背後からスーツ姿の女性が声をかけてきた。

次々と隣家の裏口から刑事らしき人が数人出て来るのが見える。その全員が不思議そうに私を見上げていた。

「その家、ちゃんとした持ち主が居るんだから勝手に入っちゃ駄目よ。」

「え?! や、あの…!」

速攻で柵から離れ、思わず一步後ずさる。

現役刑事達に囲まれた私は、追い詰められた犯人みたいだった。有り得ない状況が情けなくて溜め息が出る。

「まったく…高校生にもなって幽霊屋敷の探検でもするつもりだったの?」

「ち、違います! えっと…じ、事件に興味があつて! ここに昇れば窓から見えるかなーって…!」

「探偵ごっこって訳ね?」

「ま、まあそんな感じですよ。…ごめんなさい。」

痛い所を指摘され、咄嗟に出た口実は完全に嘘っぽい。

自分に呆れた。

「な、何があったんですか？」

「…ちよつとね。」

違う話を振って会話を逸らしてみる。

（本当は大して興味も無いけど…）

もちろん野次馬もどきみたいな一般市民に詳細を教えてくれる筈はないのは分かっていた。

だけど、このままじゃ余計な疑いまでかけられそうな気がして。

頭を悩ませていると、彼等の背後から低めの声が聞こえた。

「佐藤君？何かあったのかね？」

ふいに声の主と目が合う。
目深に被った帽子が印象的な男性刑事。
おそらく雰囲気からして、周りの刑事の上司だろう。

(あれ?この刑事さん何処かで…。)

会った事がある。

そんな不思議な感覚がしてじっと見つめていると、彼も驚いた様に目を見開いた。

「もしかして君…毛利君の娘さんじゃないか？」

「え？」

再び彼の声を聞いて、記憶が晴れた。

私が小学生になるまで刑事だった父親の職場で、よく私を可愛がってくれた父の上司。

あれから何年も経っているけど、この声と姿は彼に間違いない。

まさか、こんな風に再会するなんて…

「め、目暮さんですか？」

「やっぱり蘭君か!大きくなったなあ。」

「目暮警部、この子と知り合いなんですか？」

「ああ。今は退職した部下の娘さんでね。」

予期せず私が彼と知人同士だった事で、その場の空気がどこか和んだ。

今は探偵業の父親の話から、昔の思い出話。

数分間、それまでの緊張感が嘘のように解れていた…のに。

会話は何故か、とんでもない方向に向かってしまった。

「お父さんが元刑事で、今は探偵なんて。なら、事件に興味があるのも理解出来るわね。」

「ほ、本当にすみません。」

「でも高校生が知るには残酷過ぎるわよ。」

「…え。ここの方、もしかして亡くなったんですか？」

「知ってる人？」

「は、はい。小さい頃からよくこの辺りで遊んでましたから。」

その言葉に、女性刑事が目配せした。

「…目暮警部。」

「そうだな…一応彼女に話を聞いてみるのもいいかも知れんな。彼、ほとんど近所付き合いのない人だったみたいだね。情報が少ないんだよ。」

「…はあ。」

「一見自殺で亡くなってるんだが…不可解な点が多いんだ。」

小さな頃から知っている人が、もうこの世に居ない。

考えただけで血の気が引いて貧血でも起こしそうだった。

元々作り話のオカルト系すら苦手な私に、現実起きた事件の話なんて。

…到底耐えられそうにない。

そんな気持ちは気づいて貰えず、事件の全容…現場の状況の細部まで容赦なく聞かされる。

一応知っている限りの情報は彼等に伝えたものの、もちろん私なんかには何か分かる訳もなく。

「蘭君、悪かったね。彼について、他に何か思い出したら連絡してくれ。」

「は、はい。」

ぐるぐる目が回って倒れそうになる寸前。
目暮警部に連絡先を渡されて、ようやく開放された…

「…ただいまあ。」

「よお蘭。おかえりー。」

リビングへ入ると、さっきまでの緊張感とは真逆な緩い声。
大きなソファアールでゴロゴロ読書している新一を見たら気が抜けてしまった。
私も力なく、彼の向かいのソファアールに倒れこむ。

「新一、また本読んでるの?」

「ホームズは何回読んでも飽きねえよ。」

「よくそんな血生臭いミステリーばっか読んでられるわね…」

「何だよ、やけに機嫌悪いな。何かあったのか?」

「…あのね…」

ついさつき目暮警部達から聞いた話を、新一に聞かせてみた。

自分の中だけに留めておくのが辛くて、ことう事^{こと}に免疫のありそうな彼なら大丈夫だと思って。

でも、話始めてから後悔した。

いくらミステリー好きだからって、本物の…しかも自分の家の隣で人が亡くなったなんて知ったら、彼も苦しくなるかもしれないのにと。

…そんな私の心配は全く無用だったと気づかされたのは、数分後。

話が進むにつれ新一は、塞ぎこむどころか…もの凄く楽しそうな表情をしていた。

「それで、肝心の不可解な謎ってどこなんだ？」

「新一…何か反応おかしくない？人ひとり亡くなってるんだよ?!」

「おかしいって何が？」

「その表情^{かお}よ。やけに嬉しそужじゃない。」

今の彼は、寝る前に本を読んでもらう子供みたいに嬉しそうで、かなり興味津々で、目がキラキラ輝いてる。

「だってすげー楽しいもん。」

…ちょっと可愛い。

とすら思ってしまった私も相当おかしいかも知れない…

一通り話終わると、彼はすぐに呟いた。

「それって自殺じゃねえよ。」

「へ？」

「すぐにその刑事に電話した方がいいと思うぜ？犯人に証拠消される前にな。」

「は、犯人って…」

「他殺ってこと。ま、可能性だけだな。」

普通の人なら考えない視点。

新一はそれを持っていて、彼の推理を聞けば聞くほど納得がいく。見ていないはずの現場の光景が、鮮明に浮かんでくるみたいに。

次第に私も彼等に話さないと、という危機感を感じてきた。

でも、警察関係者でもない私達の話なんて当てになるのだろうか。その不安も過ぎたけど、彼は「大丈夫」と笑う。

もしこれが新一の推理通りなのだとしたら、犯人は必ず捕まえなくちやいけない。

そう自分に言い聞かせ、携帯を手にした。

でも、知り合いとはいえ相手は現役の刑事。

ただの高校生の推理なんて聞く耳を持つてくれるか疑問だし、もし間違っていたら凄く迷惑をかけてしまうし、少し怖い。

中々電話出来ずに緊張していると、新一は私の隣に座って笑った。

「心配すんなって。ひとつの可能性として、その刑事に伝えてみるよ。」

「…うん。わかってる。」

「本当は現場を直に見られたら確信出来るんだけどさ。オレは家から出られねえし、蘭も見たくないだろ？まあ、後は警察に任せればいいんだから。」

私は頷き、決意して電話をかけた。

隣で話す新一の推理を、私の言葉で目暮警部に伝える。

最初は試しに聞いてやるか、という雰囲気だった彼も、的を得ている数々の推理に興味を持ち始め、最後は「すぐに再捜査する」と約束して、通話を終えた。

「…これで良かったんだよね？」

「いいんだよ。結構楽しかったし。」

「や、そういう意味じゃなくて…まあいいけどね。」

「え？」

「でも新一、凄いよ。ただの推理オタクじゃなかったのね？」

「…それ褒めてんのかよ？まあ、これくらいなら蘭でも解けるんじゃないの？」

「…無理に決まってるでしょ…ばか。」

この数日後。

本当に犯人が捕まり、しかも新一の推理は寸分狂わず的中。

私は断ったのにも関わらず、警察から捜査協力の感謝状なんてものを渡されてしまった。

…しかも。

「な、なによこれー?!」

「うわー、すげえなー。」

ある日の新聞に、信じられない記事が載っていた。

「女子高生、見事難解事件の真相を見抜く! 推理力は現役探偵の父親譲り。だって。」

「嘘でしょ…私何もしてないのに?! どうしよう…!」

「いいじゃねーか。素直に喜べば。」

「あのねえ…解いたのは新一でしょ?!」

「どっちでもいいだろ、そんなの。」

頭を抱える私を見て、新一は心底楽しそうだった。

こんなに楽しそうな彼を見るのは、テレビでサッカーのワールドカップを観戦していた時以来…かもしれない。

「これから蘭苑に依頼が来ればいいのに…」

「絶対嫌。ていうか無理！」

「その時はオレが推理してやるからさ」

「勝手なこと言わないでよ！」

「あー本当に来ねえかなー、依頼。」

完全な不本意で女子高生探偵が誕生した瞬間だった…

3 (西の高校生探偵)

「…ねえ、らん。さつきから、だれとはなしてるの？」

親友の言葉を聞いた時、何となく予想していた事が確信に変わった。

でも私は、新一を怖いだなんて微塵も思わなかった。

目の前に居るはずの彼を、私以外は認識出来ないなら。

彼は私にとって特別な存在なんだって。

ああ、やっぱりそうだったんだ。それなら、私は。

ずっと彼の傍に居よう。

一人になんかさせない。

そう決意して、他の誰にも気づかれない様に彼に笑ってみせた。

あの時…きっと本当は泣き出したかった彼の、不器用な笑顔が忘れられない。

3 (西の高校生探偵)

「…もしもし。」

『蘭君、授業中なのにすまないね。ちょっと事件の事で相談なんだが…』

「大丈夫です。」

数学の授業中に鳴り出した着信。

咄嗟に理由をつけて教室を抜け出した私は、今屋上に居る。

あの事件をきっかけに、こうして目暮警部から事件について”相談”を受ける日々が始まった。

無視する訳にも放置する訳にもいかず、その度仕方なく新一に相談しながら解決していた。

こんなこと正直に「無理です」と辞めてしまえばいいのに、推理している時の新一の嬉しそうな笑顔を思い出したら、今回も彼に話してしまう自分がある。

(本当ダメだなあ…私って。)

フェンスに寄りかかって、青い空を見上げる。

晴れ渡った空には雲ひとつ浮かんでいなかった。

空、か…

「……………」

『蘭君？』

「あ、すみません。少しだけ、考える時間を貰ってもいいですか？」

『ああ、もちろんだよ。』

「それと、現場の写真を送っていただけると助かります。いつも通りパソコンの方に。」

『わかった。宜しく頼むよ。』

通話を終わると、走って教室へと戻る。

ドアを開いて担任と目が合うと、怒られるどころか…

「事件なのね？遠慮せず行ってきなさい！貴女は我が校誇る高校生探偵なんだから！」

「へ？」

「蘭、頑張ってね！後でノートのコピーあげるから安心して！」

「園子。あ、ありがとう。」

こんな事で本当にいいんだろうか？

そんな疑問はさておき、急いで机から鞆を持ち出す。

クラス中の歓声に背中を押され、私は教室を後にした…

「あ、新一？また目暮警部から頼まれたんだけど…今からそっち向かうね。」

『分かった。今回はどんな事件なんだ？』

（相変わらず嬉しそうだな…）

靴を履き替えながら、携帯で事件の内容を新一に教える。

現場写真は工藤家のパソコンに送って貰うようにしているので、内容さえ伝えてしまえば、後は彼が勝手に解決してしまうのだ。

私は彼の推理を横で聞きながら、目暮警部に話すだけ。

（事件現場の写真なんて絶対見たくないもん…）

見てしまったらたぶん、貧血どころじゃ済まない自信がある。
数日間は確実に寝込んで悪夢を見続けそうだ…

(新一って何で平気なんだろ？男の子ってそんなもん？)

そんな事を考えながら校門に近づいた時、見慣れない制服を着た一人の男の子が目に入る。

色黒の肌に黒髪。見た事のない顔。

「あんたか？毛利蘭って。」

「…へ？」

予想外に声をかけられ…いや、むしろ名前を呼ばれて思わず立ち止まってしまった。

「あの…どこかでお会いした事ありましたっけ？」

「やっぱりそうか…ふーん、何や普通の女子高生やな。」

(か、関西弁？てか誰？)

間違いなく初対面のはず。

なのに全く遠慮する事無くジロジロ見てくる彼に少し不信感を覚えた。

思わず一歩後ずさった私を見て、彼はニヤリと笑う。

「あんだ最近、東京こっちで有名な女子高生探偵やる。どんな奴か一目見たる思うてな。」

「は?!何それ?!」

「でも全然探偵には見えんわ…」

…それってまさか関西にまで噂が拡大してるってこと?

事件解決してるのは、本当は新一なの?

そんな大事になってるなんて完全に予想外だった。

頭、痛い…

「あ、まだゆつてへんかったな。オレは服部平次。あんだと同じ高校生探偵や!」

「高校生探偵?」

「ああ。あんだ、この時間に学校出てくるっちゆう事は…事件か?
そんなら…」

(い、嫌な予感がする…)

どうする…この感じ、きつとこのままじゃ何か面倒な事になる気が

する。

もし「一緒に現場に行く」とか言われてしまったら？

もちろん事件現場を直視しなきゃいけないのも嫌だけど、目の前に居る本物の「探偵」をやり過ぎるのは、並大抵なことじゃない。

「誰かに相談してる」と見抜かれたところで、新一の事は説明しようがないし。

彼の視線には隙が無い。

現にこの数分のやりとりだけで、私の事を疑っているのがよく分かる。

『蘭？何かあったのか？』

(……………あ！)

手にした携帯を見て思い出した。

急に話かけられたせいで忘れていたけど、新一との通話はまだ切れていなかったのだ。

…いけるかもしれない。

「ご、ごめん新一！すぐ行くから！また後で電話するね！」

「？シンイチ…？」

「あの、別に事件とかじゃないの。聞いての通り、ちょっと知り合いが急用で早退するだけで…」

「……………ほー。知り合い、か。」

通話時間が表示された携帯画面を見せ、本当に電話してた、とアピールしてみた。

…でも。この目はめちゃくちゃ疑ってる…

一歩ずつ詰め寄られて、ついに背中に校門の柵が当たった。もう逃げ場が無い。

「なあ。今までの事件、ほんまにあんたが…」

「へーじいー！…！」

「「え？」」

突然聞こえた大声に、私と彼は同時に振り向いた。

数十メートル先からセーラー服の女の子が走って来るのが見える。

「げ！和葉！！！」

(今度は誰よ…)

息を切らして辿り着いた彼女は、呼吸を整える事も無く彼を睨みつけた。

「平次！あんた何処行ってたん？！めっちゃ探したやん！！」

「い、いやー道迷うて…」

「嘘！！東京見物やけに楽しみにしてる思ったら…この子に会いに来たんやろ！！
いつの間に東京で女作ってんの？！」

「はあ？」

「最低！！平次のアホ！！」

あまりの勢いに、私は為す術なく見物しているしかなかった。
さっきまでの緊張感は何処へやら、彼は思いつきり彼女に圧倒されている。

彼女は今度は私を睨みつけた。

「ふーん…結構可愛いやないの。ふーん…」

明らかに敵対心剥き出しの視線。
彼から開放されたと思ったら、今度は彼女に捕まってしまった。
怒りの矛先が私に向いたのをいいことに、彼は少しづつ彼女の背後へ移動している。

「そや…オレ、寄るところあんねん。…集合時間には戻るわ！」

「え?!」

(…に、逃げた…)

言いながら、すでに全力疾走していた彼の姿はすぐに見えなくなる。
結局訳が分からないまま見知らぬ女の子と2人取り残されてしまった。

何となく気まずい空気が流れる…

「…で?いつから平次と付きあうてんのん?」

「え?いや、何か勘違いしてませんか?」

「何を?あんだ、平次の女なんやろ?」

「ち、違います。彼とは今初めて会ったばかりで…」

「…とぼけたかてあかんで。」

一通り説明しても、彼女の疑いは晴れない。
女の子って疑い深いからな…
どうしたら信じてくれるだろう。

その方法は悩むまでもなく、ひとつしかない。

「あのね…わたし、好きな人居るから。服部くんとは何もないよ？」

「…好きな人？」

「うん。これからその人に会いに行くところだったの。」

「…そうなん？」

咳くと彼女は、あどけない微笑みを浮かべた。
さっきまでの表情が嘘みたいに、笑うと可愛い。

どうやら修学旅行で東京見物に来ている大阪の学生さんで、今は自由時間。

さっきの彼は「西の高校生探偵」と呼ばれるくらいの有名人で、彼女は彼の幼馴染…という事だ。

(なんとか疑いは晴れたみたいだけど…)

それにしても。

「平次は何処行ったんやろ？」

(…何かまた嫌な予感がする…)

4 (きみの瞳)

「なあ、その人って蘭ちゃんの彼氏？」

「か、彼氏？…うーん、そっか。彼氏…になるのかな。」

「ええなあ！羨ましいわ。」

「和葉ちゃんこそ、服部君と付き合ってるんじゃないの？」

「ちゃうよ。平次にとってアタシはただの幼馴染や…」

そうやって俯き、寂しそうに笑う彼女。

でも私は、そんな彼女こそ羨ましい。

だって想いが通じさえすれば、彼に見せたいものを見せてあげられる。

夜空いっぱい流れ星。

水平線が朱く染まる海。

青く輝く一面の雪。

そんなに多くは望まないから。

せめて死ぬまで、彼と同じ景色を見ていたいのに。

4 (きみの瞳)

「結構遅くなっちゃったなあ……」

和葉ちゃんと別れた後、とぼとぼ一人で考え事をしながら歩いていった。

高校生探偵であるという「服部平次」。

彼の鋭い視線を思い出すと、何もかも見抜かれているようで……

仮に誰かに本当は私の推理ではない事が分かって、新一の事を突き止められたとしたって、彼の存在が世間に広まる事はないけど。それでも極力、面倒になりそうな事態は避けておきたかった。

新一が「自分は蘭以外に認識されない」という彼自身の存在をどう思っているかは分からない。

だけど、出来るだけそっとしておいてあげたい。

傷つく様な嫌な出来事があったって、彼はきつと顔に出さないから。

もっと頼ってくれたらいいのに。

彼の性格は分かっているけど、やっぱり寂しい。

いつも私が甘えてばかりで、彼が私に頼ったり甘えたりすることは
少なかった。

そんな記憶はほとんど無いに等しい。

(私じゃ頼りないのかな…)

考える程、気分は沈む。

空はこんなに晴れ渡っているのに、私は下を向いて歩いている。

いつもの立派な扉が余計に重く感じた。

「新一、遅くなってごめんね。」

「あ、蘭おかえり。」

リビングに着いた私は、そこに居た人物の姿を見て持っていた鞆を
思わず落とした。

「……………え。」

「よー姉ちゃん。邪魔してんで!」

全く意味が分からない。

ごく自然にソファ―に腰掛け、笑顔で右手を軽く上げたのは間違いなく彼。

「服部平次」。

(どうして彼が此処に?! てか、新一のこと見えてる?!)

親友の園子や新一の両親でさえ彼の姿は見えなかったのに?
今日突然現れた彼には見えている??

「しっかし今回の事件は単純過ぎてつまらんかったわ。そや! なんだオレが遭遇した事件、めっちゃおもしろくてな…!」

「へー。そりゃ確かに面白そうだな。そっぴやオレもこの前…」

「おー何やワクワクしてきよったで〜! やっぱオレとお前はどっか似てんのやな〜」

(しかもすでに仲良さそうにしてるし!)

私は開いた口が塞がらず、しばらく突っ立ったままだった。それに気づいた新一と目が合って、やっと我に返る。

思わず彼の腕を引っ張って廊下へ連れ出した。

「し、新一！何で彼が此処に居るの？」

「ああ…さつき、玄関の呼び鈴を連続で鳴らしまくられて。

あまりにうるせーから思わずドア開けたら、何故か普通に話しかけてきたんだよ、あいつ。」

「それでいつの間にか意気投合しちゃったの？…てか変な事聞かれなかった？」

「や、特には。雰囲気からしてオレの事は何も気づいてないと思うけど…」

「…どうしたの？」

「何かあいつ、初めて会った気がしねーんだよな。初対面のはずなのに。」

…過去に何処かで彼と会った事があるっていうこと？

今まで新一から彼の話を聞いた覚えは一度も無い。

彼が新一を認識出来るのには、他の人とは違う何かがあるんだろうか。

二人して今の状況を理解出来ずに居ると、困惑の元凶である張本人が顔を出した。

「なあ。その目暮っちゅう刑事に早いとこ電話した方がええんちゃうか？」

「へ?!」

「隠さんでもええ。姉ちゃんがほんまの探偵じゃないんは最初見た時から分かってもうたわ。」

「そ、そう…だよな。やっぱり…」

若干失礼な事を言われてる気もするけど仕方ない。

間違いなく事実で、いつ誰かに知られてしまってもおかしくない状況だったのだ。

それよりも気がかりなのは。

「あの、新一が代わりに推理してるって事は…誰にも、言わないでくれる?」

「心配すんなや。オレは別にそこには興味無いねん。あんたらにはあんたらの事情があるんやろ?」

「じゃあオメー此処に何しに来たんだよ?」

「オレと同じ『本物の』探偵をこの目で見ておきたかったんや。それに此処は昔…」

言いかけて、彼は言葉を濁した。

一瞬の沈黙の後、携帯の着信音が鳴り響く。
着信相手を確認した彼は、明らかに不機嫌そうな顔をした。

「…まあた和葉や。何やねんアイツ。しつこいやっちなあ。」

「そついえば修学旅行中なんじゃなかったの？時間大丈夫？」

「時間？そんならまだ余裕が…」

「あ。そついや時計動いてねえよ。」

「…なんやと？」

「だから、あの時計動いてねえんだって。」

「……………」

「…服部くん…電話、出た方がいいんじゃない？」

「あ、ああ…そつみたいやな…」

案の定、通話ボタンを押した直後から響き渡る和葉ちゃんの怒鳴り声。

すでに集合時間を過ぎていたらしい彼は、携帯を30センチ以上耳

元から離れた状態で、面倒臭そうな顔をしながら怒られ続けている。

『ええ加減にせえや！！どアホー！！！！』

その言葉を最後に乱暴に切られる通話。

私と新一は黙って見守るしかなかった…。

「気をつけてね。駅までの道、分かる？」

「大丈夫や。東京初めてやないからな。」

「あ、ねえそつえば…どうして新一の家を知ってたの？」

「え？…あ、ああ…来る前に姉ちゃんの事、少し調べてな。まー細かいこと気にすんなや。」

（細かい事って言われてもなあ…）

「ほな、また来るわ！」

今日一日ですっかり馴染んでしまった彼は、笑顔で玄関を出て行く。
新一はずっと考え事をしているみたいだった。

彼の姿が見えなくなった後も、しばらく黙ったまま。

「新一？どうかしたの？」

「…いや。何でもねえ。」

目暮警部への連絡を済ませた頃には、陽が傾いていた。

新一は、ぼーっと窓の外を眺めている。

（いつもなら推理した後、凄く楽しそうなのに…服部くんの事、気
になってるのかな？）

私は新一の隣に座って、彼と同じ景色を見てみた。

大きな窓。

でも、ここから見える空は……

「蘭…あのだ。」

「…ん？」

「前に何かの本で読んだ事あるんだけど。人間の瞳って、すげーよく出来てるんだって。」

黙って彼の声に耳を傾ける。

新一の肩に頭を寄せ、沈んでいく夕日を眺めた。

「絵とか写真とか、綺麗な景色ってよく見るけど…どうしても実際に見る景色には劣るんだって。」

「やっぱ、切り取られたものって勝てねーんだ。」

人間の瞳は、右左もどっちを見渡しても、視野いっぱい広がる景色を一番綺麗に認識するって。」

「……………」

「…ここから見える景色は、いつも切り取られた作り物みてーって思う…何か笑えるよな。」

「オレはこの景色以外知らなくて…今見えてる空だってこんなに綺麗、なはずなのに。」

新一はいつも通り笑ってる。その表情に曇りは無いのに。

言葉は、悲し過ぎる。

だから彼を抱きしめた。

こうして傍に居たら、全て私が代われたらいいのに。

「…新一。泣いたっていいよ？見えないし。」

「…泣かぬーよ。」

本当は、泣きたいのは私の方。

彼もそれを知っていて、でも心地良さそうに私の腕の中で目を閉じた。

私は新一に無限の空を見せてあげられない。

けどずっと一緒に居るから。

新一の瞳に映る景色がいつも綺麗で在る様に、笑っていられるように。

…傍に居る、から。

「…本当は知ってる気がする。オレがこうなる前に見た、どっかの空…。」

「…え？」

「あいつ…服部の事も。」

5 (あいのじやま)

「…なに？」

キスの途中に聞こえた、少し不機嫌そうな彼の声。

私が彼の口元に指を当て、それを止めたから。

…分かっているのに。

今日もまた言葉にする。

「…好き？」

「…んなの言わなきゃ分かんねえの？」

この質問には、いつも明確な答えは返ってこない。
すぐに指は解かれて、曖昧にされてしまう。

”すき”の二文字。

女の子が一番欲しがる言葉。

彼から聞いたことは一度も無かった。

5 (あいのことば)

(あーあ…昨日も聞けなかった。)

本来学生なら集中すべき授業中、私は全く関係ない事を考えていた。

数日前に偶然出会った大阪の女子高生。

彼女の質問に答えてから、今まで考えない様にしていた不安が過り始めていたのだ。

55

私の好きな人。

その人は彼氏？と聞かれて、一応肯定したけど…

(彼氏…なんだよね？や、でも…)

一般的には恋人になるのって、想いを伝えてそうなる訳で…

どっちかが伝えたら、もう一人が返事して。

両想いって確認したら晴れて恋人。とかそんな感じだと思う。

記憶を辿ると彼から聞いた覚えの無いその二文字。

私はもちろん伝えてる。

だって本当に彼が大好きで仕方ないから。

でも、いつも彼の返事って…聞けてないような。

(…あれ？もうこんな時間だったんだ…)

終業のチャイムが鳴り響き、一気に現実に引き戻される。

心のモヤモヤが晴れないまま、溜め息をつきながら教科書を閉じた。

「蘭ってさ。本当は彼氏居るでしょ？」

隣の席から突然放たれた言葉。

「え?!?!?!」

あまりに急で、多少声が裏返ってしまっただけ。彼女はそれを見逃さなかった。

「あーやっぱり!?!だって最近ずっと切なそうに溜め息ついちゃってさ…:やっぱり恋の悩みだったのね?!」

「ち、違うよ園子!」

「ねえ〜どこの誰なわけ?!教えてよ!親友でしょ?!」

「だから居ないってば…!」

…私の言葉は彼女の耳を素通りしているらしい。

小さい頃から親友である園子には、一度だけ新一について話したことがある。

話した…と言っても核心に触れた訳じゃなくて「新しい友達が出来たから紹介する」と彼の家に連れて行ったのだ。

あの時の事は今でもよく覚えてる。

”…ねえ、らん。さつきから、だれとはなしてるの?”

始めは冗談かと思ったけど、彼女の顔を見て悟った。

園子には本当に新一の姿も見えてないし、声も聞こえていない。

だからそれ以上、何も話せなかった。

一番の親友である彼女に隠し事をするのは辛かったけど、心配かけたくなくて。

「せめてさ、告白の言葉だけでも教えてよ。今、ちょっといいかな
くって人がいるんだけど、ここはストレートに好きです！がいいと
思う？」

「い、告白？」

そっだ…やっぱり普通、恋人同士には『告白』が存在する。

片思いからの発展。勇気出して呼び出したり、電話やメールで伝え
たり…

でも……

「…言われたことないな。そんなこと。」

「…え？好き！とか愛してる〜とか、何かしらあったでしょ？さす
がに。」

「ないよ。変…なのかな？」

「ちょっと？！それ、遊ばれてんじゃないの？！」

大声で机を豪快に叩いた園子に、クラス中の視線が集まった。
会話が会話だけに、心なしか白い目で見られてる気がする。

園子は軽く咳払いすると、私に耳打ちした。

「蘭、まさか…その男によからぬ事まで許してるんじゃないでしょ
うね?」

「な、ななな…なにそれ?」

「決まってるでしょ!わざわざ言わせる気?」

「うう……………」

「…まさか凶星?」

「や…でも、言葉で言われなくても好きでいてくれてる感じはする
けど…」

それにやっぱり私が好きだから、何て言うか…」

「つまり流されちゃってるってこと?」

「…うん。ダメ…かなあ。」

「ダメダメ!!絶対駄目よそんなの!!男なんて表面だけじゃ分か
らないのよ?!」

「そ、そうかなあ……………」

「そうよ!!本当に大丈夫なわけ?その人……………」

大丈夫?と聞かれても答えようがなかった。

(この前の服部くんはとりあえず別として。)

新一は私以外には認識出来ない。

つまり他の女の人と関わりようが無いんだし、さすがに遊ばれてるなんて事は…

って…でも待って。

もし、その逆だったら？

私しか居ないんだから、仕方なく…とか…

だから言わないんだとしたら合点がいく。

でも、それは最悪の結末。

もし本当にそうで、問い詰めることで彼が認めたらどうするの？

「…どうしよう。やっぱり聞いた方がいいのかな？」

「いいに決まってるでしょ？はつきり聞いてきな！」私の事どう思ってるの”ってね。」

「…う、うん。でも…」

この場で決意しても、新一の顔を見たらきつと気持ちは揺いでしま
う気がした。

私は彼の事が好き過ぎて、いつもどこか少し緊張してて。

もう出逢って10年以上経つのに…気持ちは冷めるどころか、時が
経つほど大きくなる。

彼が目の前に居ると胸が苦しくなるし、触れた指は震える。

一緒に学校に通ったり休日どこかへ出掛けたり…『普通のこと』は出来ないけど、傍に居られたら充分だった。

新一が隣に居て、くだらない事を話して笑って…それ以外何も望まないくらいに、彼が好きで。

もう『好き』なんて簡単な言葉じゃ表現し切れないのかもしれない。

彼に本当の気持ちを聞くのは怖い。

けど、もし新一が”すき”って言うてくれたら…

私はきつともう、新一から離れられない。

今でもそうだけど、今以上に。

「でも、何？」

「…聞けるか不安なの。」

「しょうがないわね。じゃあこの園子様が直々に…」

「や、聞いてくる！私、頑張るから！」

「何よ、そんなに会わせたくない人なの？」

「…そのうち、ちゃんと話すから。ごめんね…でも、ありがと。園子。」

そんな会話の後、今私は新一の家の前に立っていた。
一度気になり出すと全てが上の空で、部活は休んでしまった。

今日は何だか、この洋館に圧迫されている錯覚さえする。
それくらいに緊張するけど、扉を開けばもうやるしかない。

「あれ、蘭？今日早いな。部活は？」

「き…今日は休みだったの！」

彼はいつもの部屋で読書していた。
立派な机の上には分厚い本。
頬杖をつきながら笑顔をみせた彼は、いつもと何も変わらない。

違うのは私自身だ。

変に意識しているせいで声が上がってしまいそうだった。

時間が経ったらまた迷ってしまう…。だから、今すぐ。
聞くしかない。

「し、新一ー!」

「な、なんだよ?」

詰め寄る私に圧倒された彼は、座っていた椅子から落ちそうになっ
た。

「あの…どうしても聞きたい事があるんだけど…」

「…聞きたい、こと?」

言いながら体温が上がっていくのが自分で分かる。
目を逸らしたくなるけど、真っ直ぐ見つめて聞かないと意味が無い。

「し、新一って…その…。。」

「え?何?」

「だ、だから…えつと…」

「蘭?聞こえねえよ…」

「わ、私って、新一にとって”彼女”なの？」

精一杯振り絞った言葉は、本来発するはずだったものと少し違った。彼は完全に『？』を浮かべた困惑の表情。でもすぐに笑顔になった。

「んな事気にしてたのかよ？何言つかと思ったたら…」

「…ごめん。」

「あー、でも確かにあんまり考えた事なかったな…そういうの。」

「そう、だよな？」

…やっぱり。

今のは答えになってない。

もしかして、意図的に話逸らしてない…？

考えていた最悪の事態がまた頭を過って、途端に弱気になってしま
う。

”…こんな思いしてまで、聞かなくちゃいけないもの？”

今のままでも充分幸せなのに。
でも、私も…ちゃんと知りたい。

「新一は…」

彼の瞳が微妙に揺らいだ。きっと彼は私の言葉を予測している。

照れて言えない、とかならないよ。無理に聞かないから。

だけど彼の場合はどこか違う。

本当に言いたくなさそうに感じる。

「私のこと、本当に好き…?」

呟いた声は、諦めかけたように震えていた。

6 (雨の記憶)

「私のこと、本当に好き…?」

今にも泣き出しそうに震えた声。

蘭の気持ちを知っていて、それでも絶対に言わなかった。

別に照れ隠しじゃない。オレ自身が言葉にしないと決めていた。

嫌いだなんて嘘でも言えないから。

問われる度に曖昧にして、誤魔化し続けてきた。

こうなる事を予測して、ずっと待ってたんだ。

たった一つの方法だと信じて。

6 (雨の記憶)

いつから此処に居たのかは分からない。

目を開くと、一番最初に高い天井が見えた。

それまで何をしていたのかは全く覚えていなくて、思い出せるのは自分の名前と、此処がそれまで住んできた家だという事だけ。

起き上がって辺りを見回しても、誰も居ない。

広い廊下は静まり返っている。

仕方なくリビングのソファに座って、窓の外を眺めた。

天気は大雨。

おそらく昼間なのに薄暗い空は、時折雷が鳴り響いている。

眺めながら、何となく自分の身体に違和感を感じていた。

起きたばかりなのに睡眠をとった感覚が全く無くて。どこか、何か物足りない。

それが何なのかは理解出来なかったけど。

「急に降って来ちゃったわね。雨宿りしていつて？後でお母さんの所に送ってあげるから。」

「…うん。」

突然、玄関の方から話し声が聞こえた。

大人の女性と、小さな子供の声。

(…かあさん、かな。)

ソファーから降りて玄関へ向かうと、濡れた傘をたたんでいる母親の姿が見えた。

その傍らに、見た事のない同じ歳くらいの女の子。彼女の方は全身ずぶ濡れだった。

「すぐに拭くもの持ってくるからね。」

「ねえ、かあさん…その子、だれ？」

「此処でちょっと待っててね！」

確かに問いかけたはずなのに、見向きもせず素通りされてしまった。

廊下の奥へと消えた背中では、結局一度も振り返らない。

(聞こえなかったのかな?)

気にも留めずに、黙ったまま突っ立っている女の子に視線を移した。今にも泣き出しそうな彼女は、寒さのせいか小さく震えている。

「傘、持ってなかったのか？」

「いきなりふってきたから…」

「蘭ちゃん！お待たせー！」

タオルを持って走り寄って来た母さんは、彼女の頭からそれを被せ、くしゃくしゃと拭いてやった。

まるで自分の子供に接している様に、優しい目をしながら。

「寒いでしょ？温かいミルク入れてあげるからね。」

その間何度か母さんに話しかけても、やっぱり返事は返らない。視線すら合う事も無かった。

（なんか悪いことでもしたっけ…）

悪戯したとか、言いつけを聞かなかったとか？それで怒って無視しているのかもしれない。

でも、オレには何も思い出せなかった。

ソファアールに戻って考えていると、前に座った女の子の前だけホットミルクとクッキーが置かれた。

オレに原因があって怒っていたとしても、ここまで差別するなんて

呆れる。

隣に居る母さんは相変わらずオレの方を見ない。
いい加減話しかけるのも馬鹿らしくて、オレももう何も言わなかつた。

しばらくすると、それまでじっとオレ達を見ていた「蘭」がぼつりと呟いた。

「ねえ…どうして怒ってるの？」

「…え？やーね蘭ちゃん。私、怒ってなんかないわよ？」

「でも。無視されてかわいそう…」

彼女がオレを指差すと、やっと母さんと目が合った…

気が、した。

…変だ。

確かにこっちを見てるのに、どこか視線が合わない。

まるでオレを突き抜けて、向こう側を見ている様に。

「…蘭、ちゃん？誰が可哀想なの？」

母さんの声は微かに震えていて、でも笑顔を崩さずに問いかけた。蘭の答えに、何かを求めているように。

「わたしと同じくらいの、おとこの子。」

「…蘭ちゃんには、その子が見えるの？」

「うん。おかあさんにずっと話しかけてたよ？」

母さんはじっと、オレの方を愛おしそうに見つめている。

「…その子の名前、聞けるかな？」

「…んつとね…しんいち、だって。」

瞬間、母さんはその場に泣き崩れた。

初めて見たその姿にも動揺したけど、それよりも訳が分からない。

とにかく、泣いている原因が自分なら「泣く必要なんて無い」と伝えればいい。

そう思って、手を伸ばした。

だけど。

母さんの肩に触れたはずの右手は………空を切った。

(…なん、だ？いまの…)

一瞬で血の気が引いた。

よく分からない、分からないけど…何度やっても結果は同じだった。

何かが今までと違う。でも、何が？

頭に浮かんだのは父親だった。

世界的有名な推理小説家。様々な事件に詳しい彼に聞けば、何か分かるかもしれない。

すぐに受話器をとり、父さんの携帯に電話をかけた。
手が震える。自分の体じゃないみたいに。

何が起きているのか早く知りたかった。

『…はい、工藤です。』

「とうさん?! 大変なんだ... おれ...」

『...もしもし?』

「きこえる?! おれだよ、新一!」

『...? おかしいな... もしもし?』

「とうさんまで... きこえ... ないの?」

乱暴に受話器を置くと、玄関を開けて傘もささずに飛び出した。

誰でもいいから。

早く誰かに冗談だと言って欲しくて。

父さんと母さんが、二人揃って驚かせようとしてもしてんるんだ。
誰か他の人に会えば、きつと否定してくれる。

...そう、思ったのに。

「うそ、だろ...?」

本当なら今頃ずぶ濡れで、水溜まりも気にせず走り抜けてるはずだ。
だけど目の前に広がる光景は、さっきまで居た家の中だった。

「…どうなってんだよ?!」

何度扉を開いても、どうしても…外に出られない。

どれだけ繰り返しても結果は同じで。

募る苛立ちと不安で、頭が変になりそうだった。

「ねえ。だいじょうぶ…?」

「……………」

…そつだ。彼女は確かに。

「なあ…おれのこと、みえてる…?」

「え?うん。みえてるよ?」

「声も、きこえるんだよな…?」

「きこえるよ。」

蘭に、手を差し伸べた。

彼女は何も理解していなかったけど、黙ってその手を取り、握った。

やっぱり。蘭にはちゃんと接する事が出来る。
でも彼女は、普通に母さんと会話が出来る。

…つまり、おかしいのはオレだけだ。

あれから何日経ったんだろう。

どれだけ経っても到底受け入れられるはずが無い「事実」。

左胸に手を当てても何の鼓動も感じない。

自分の姿は鏡に映らない。

『眠る』『食べる』など、日常の行為も必要無くなった。

さっき来た蘭の友達にもオレの姿はやっぱり見えなくて。

つまりオレは、両親以外の人間にも認識されない存在。

それが今日はずきりと証明された。

だけど、蘭があまりに普通に接してくれるから余計に信じられなく

て。

彼女と居る時だけは、自分が普通じゃない事を忘れていられたから。

「ねえ…しんいち？」

友達の事で気を悪くしていないか、と問いたそうな顔。
無理して笑顔を見せる彼女は、何故か自分の事の様に辛そうだった。

「気にすんなよ。そうだろうなって思ってたから。」

「…わたししか、一緒にあそべないんだね…ごめんね。」

「しか、じゃねえよ。」

「え？」

「蘭がいてくれて…よかった。」

蘭が居なかったら。

オレは完全に一人で、この世界に取り残されていた。
想像するだけで怖かった。

誰にも認めてもらえなくて、話す相手も居なくて。

これから何をしたらいいのかも分からなくて、ただずっと一人で「存在」だけはしてなきゃいけないなんて。

理由は分からないけど、世界でただ一人だけ自分を見ていてくれる
蘭。

オレにとっては、これ以上無い救いだった。

(…でも、これからどうすればいいんだよ…)

蘭の話で事情を知った両親は「蘭さえ良ければいつでも遊びに来て
欲しい」と彼女に鍵を預けた。

二人は父さんの仕事で留守が続いている。

蘭は毎日遊びに来るけど…このままいつまでもずっと、彼女を引き
留めている訳にもいかない。

これからの事は、自分で何とかするしかない。

それが、例え死ぬほど辛くても。

一人なんてすぐ慣れる。

そう自分に言い聞かせた。

「あのさ…もう、大丈夫だから。」

「え?」

「もう、ここへは来るなよ。普通のとちと遊んだほうがいいだ
ろ。」

「…しんいち?」

本当は誰かに傍に居て欲しい。だけど弱い自分には誰にも見られたく
なかった。

物心ついた時から両親は多忙で、幼いながらに「良い子で居なきや
駄目だ」と思い込んだ。

もっとしつかりして、我儂言ったり絶対しないって。

何があっても絶対、人前では泣かない。

それは自分で決めたルールだから。

でも蘭は帰ろうとはしなかった。

「…だめ、だよ。」

「なにがだめなんだよ？」

「わたし…決めたから。」

彼女は笑った。

何の迷いもない笑顔で。

「しんいち。約束、しよ？」

「…やく…そく…？」

「うん。あのね…」

言いながら、彼女は左手の小指を差し出した。

あの日から、ずっと。

オレにとって蘭の存在がどれだけ大きいかなんて、表現出来ない。

絶対大切にするって思ったんだ。

それが出来るって、まだどこかで信じてたから。

蘭と交わした約束が、彼女を繋ぐ枷になるなんて思っていなかった。

7 (ふたりの約束)

人の『こころ』は変だ。

いくら強く想っても、願っても。必ず薄れて忘れてしまう。
人の頭の中には最初からそういう機能がついてるから、どんなに逆らったって無理なんだ。

身体が離れている限り永遠には一緒に居られない。
だけど人は皆、それでも何とか誰かと結ばれたいと願ってる。

” 約束、しよ？”

80

彼女の提案、それは。
無理矢理『こころ』を繋ぐ為の手段だった。

7 (ふたりの約束)

「わたしは、これからも毎日ここへ遊びにくる。」

「……………」

”しんいちを一人にしない”…これが、わたしの約束。」

「…なんだよ、それ？後でいやになってもしらねえよ。」

「ならないもん。」

「…だけど…」

「もう決めたの。だから、しんいちもなにか、わたしに約束して？」

今思えばそれは、約束と言う名の”誓い”だ。

どうして突然言い出したのかは分からないけど、彼女の笑顔は揺るがなかった。

何かを決意したような真っ直ぐな眼差し。

不安定な自分には、たったひとつの道標に思えた。

自分自身にかける誓いなら。

オレは蘭に何を約束できる？

今の自分には何も残っていない。

…それならせめて、ずっと此処へ来てくれると誓った彼女の為に。

「じゃあ…」勝手に蘭のまえからいなくならない”って約束するよ。」

「え？」

「自分がどうなるかなんてわからないけど…もし、消える時がきたら。その前に必ず蘭に話すから。」

「しんいち、いつかいなくなっちゃうの？」

「…わかんね。でも、人間だっていつか死ぬだろ。」

「…じゃあそれが、しんいちの約束。」

そう言って、お互いの小指を結んだ。

たぶん、本当には理解出来てなかったと思う。
子供だったし、現実に”死”について考えた事なんか無かったんだから。

でも、蘭は指を離さなかった。

「蘭？」

「…ねえ、もうひとつ約束しようよ。ふたりで守る約束。」

「ふたりで？」

「うん。なにかないかなあ？」

「なにかって言われても…おれ、なにも…」

「じゃあ…ねがいごとはないの？それを一緒にかなえるの！」

「ねがいごと…？」

もしも、本当に叶うんだったら。

だけどそんな事、望むだけ無駄だ。

言葉にしたって虚しいだけで、蘭を困らせるに決まってる。

ふと、窓の外を眺めた。

オレはこの家から外に出た事があつたんだろうか。

目覚める以前の記憶が無いから、此処から外の世界がどんなものか分からない。

見える景色は四角い枠に切り取られていて。

「なんでもいってよ。わたしがかなえてあげるから！」

蘭は優しく微笑んだ。

彼女の言葉は、いつだって本当に優しくかった。

その笑顔も、声も。今では絶対失いたくない。

あの日から蘭が居たから、オレは自分を失くさずに居られたんだ。彼女が居なくなったら…そんな事、想像すらしたくないくらいに。

…たぶん初めて逢った時からずっと。

オレは、蘭の事が…。

「…そら。」

「…え？なあに？」

「…そら、がみてみたい。」

「そら？そらなら、どこからでもみえるよ？」

不思議そうに首を傾げた彼女は、窓を指差した。
普通はそつだ。

区切られていない空を何の意識もしないで見ていられたら、オレだつてきつと分からない。

ずっと疑問だった。

この枠を含めた景色しか知らないはずなのに…果てのない空を見てみたい、なんてのも変な話だけど。

いつか、蘭と同じ空を見られたら…

そう思った。

数日後。

いつもより遅い時間に来た蘭の様子は、少し違っていた。

「あ、しんいち!」

「どうしたんだよ、その荷物。」

小さな体に両手いっぱい大きな袋を下げた蘭が、よたよたと近づいてくる。

一度袋を床に置くと一息ついて、オレに笑いかけた。

頭には少し雪が積もっている。

「ねえしんいち。きょうは、ずっとホームズよんでて？」

「は？なんで？」

「いいから、ね？」

そう言った蘭に背中を押され、父さんの書斎に押し込まれた。

「おい？なにするつもりなんだよ！」

「ひ・み・つ！あとで教えてあげるから……」

勢い良く扉を閉め、走り去っていく音が聞こえる。

その後は静まり返り、廊下の様子を見ても変わった様子は無かった。

「……なんなんだよ、ったく。」

仕方なく、読みかけの小説を手取る。

昔は難しい漢字は読めなかったから、その度に辞書で読み方と意味を調べていて、1冊読み終えるのには相当時間がかかっていた。

それでも謎を読み解く様な感覚で楽しくて、蘭が居ない間はずっと本ばかり読んでいた。

本当は蘭と居た方が楽しいんだけど……

(そついえばさつき…蘭の頭に雪、積もってたな。)

ふと思い出してカーテンを開けると、薄暗いグレーの空に粉雪が舞っている。

色とりどりの屋根に薄く積もり、見慣れた景色は違う街みたいだった。

向かいにある変わった形の家。

あれは確か子供の玩具とかを発明している科学者の家で、個性的な飾りが施されている。

その飾りの一つに刻まれた文字。

「 めりー…くりすます？あれ、今日って何日だったけ… 」

眠らなくなってから時間の感覚が無くなっていた。
壁にあったカレンダーを眺めて、数えていると…

「 ？！なんだ…？！ 」

どこからか、もの凄い音がした。

何かが倒れて引っくり返った様な音。

過ぎったのは蘭だった。

「おい蘭?!何かあったのか?!」

廊下から呼びかけると、向こうの部屋から蘭が顔を出した。
その部屋は子供部屋…つまり、オレの部屋だ。

「だ、だいじょうぶだから!」

「ほんとに何やってんだよ?!」

彼女はその問いに答えず、すぐに部屋の中へと消えてしまう。
駆け寄って扉を引いても開かない。

「蘭、あけるって!」

「だめ!もうちょっとまって!」

あまりに必死な彼女の声。

オレはそれ以上何も言えずに、仕方なく手を離した。

…それから書齋に戻って、もうだいぶ時間が経っている。

蘭が考えている事が全く理解出来なくて、オレは溜め息ばかりついていた。

せっかく会えたのに別々の部屋で何してんだか…意味が分からなくて笑えてくる。

すでに沈みかけの夕陽。

白い景色が朱く染まり、所々でイルミネーションが点灯し始めていた。

(蘭のやつ、さすがに終わったかな…)

彼女が居る部屋の前に立って、そつと中の様子を探ってみた。

物音はもうしない。

恐る恐る扉を引くと、鍵は開いていた。

「…らん？」

返事は無い。

しん、と静まった部屋は、開け放たれたカーテンから夕陽が差し込んでいた。

その光景に思わず声を失う。

「…え。」

広がるのは、大きな空だった。

真っ白で何も無かった天井に、青空が描かれている。

夕陽に染まって、まるで本物の空みたいで。

「すげえ…」

思わず呟いた言葉は本心だった。

大きな太陽と、様々な形に沢山描かれた雲。

今まで、こうして空を見上げる事なんて出来なかったから。

視線を落とすと目に入るのは、床一面に散らばった水彩絵の具。

沢山の筆と、引っくり返った筆洗器。

そして天井まで届く高い脚立。その傍には眠っている蘭の姿があった。

「ん…しん、いち？」

「蘭…これ…」

「…そら、みてみたいって言ってたから…」

蘭は目を擦りながら起き上がった。

服も顔も絵の具が付いていて分かりにくいけど、頬を怪我して
いて膝に痣がある。

もしかしたら脚立から落ちたのかも知れない。

…どうして、そこまでして？

あんな願いを叶える為に。

「しんいち。きょう、何の日だかしててる？」

「え？」

「クリスマスはね、プレゼントがもらえるんだよ。だから…しんいちにあげる。」

言ってしまうえば、所詮子供の落書きかもしれない。

だけどオレには充分過ぎた。

代わりに彼女にあげられる物なんて何も無かったけど…

少しでも感謝の気持ちが伝わるように。

「ありがとな、蘭。すげえうれしいよ。」

「どういたしまして！」

蘭も満面の笑顔で答えた。

「いつか、いつしよにみようっ？…もっとおおきいそら。」

「…そう、だな。いつか絶対、いつしよにみよっぜ。」

「じゃあこれが、ふたりの約束ね！」

それくらいなら、きつといつかは叶えられる。そう信じた。
目の前は真っ暗で何も見えなかったから。

…本当はそんな約束すら守れないって。

「これ…かあさんがみたら怒るかもな…」

「…へ？やっぱりだめ、だったかな…？」

まだ何も知らずに、ふたりで笑い合っていた。

8 (彼の気持ち)

「いつか一緒に本物の空を見よう」

そんな些細な事すら叶わないまま月日は流れ、蘭は中学生になった。制服を着た彼女は急に大人っぽく見えて。

∴あの時交わした約束に迷い始めていた。

学校帰りに毎日ここへ来る蘭は、部活や遊びも我慢しているのかもしれない。

普通の生活を犠牲にしているなら、そんなの本当に幸せなはずないって分かってるのに。

「もう来るな」とは言えなかった。

オレは彼女に会いたかったから。

8 (彼の気持ち)

「新一。今日…泊めて。」

「…は？」

「こんなに沢山部屋があるんだから、ひとつくらい借りてもいいでしょ？」

「いや、そういう問題じゃなくて…何かあったのか？」

その日は彼女の様子が変わった。

ソファ―に座っていたセーラー服姿の蘭は、膝の上の掌を固く握り締めている。

下を向いたままで、その表情は読めない。

けど「帰らない」意思を断固譲る気は無いらしい。

「…お父さんなんて…だいつ嫌い。」

ぽつり、と咳かれたその一言から、何となく理由を察した。

蘭と彼女の両親は昨日、久しぶりに3人揃って食事をすると言っていた。

（両親は彼女が小学生の頃に離婚していて別居中）

恐らく父親が原因で母親と喧嘩か…まあ何かしら起こって、最悪な

食事会になつたんだらう…

昨日ここから帰るまでは「これからお母さんと会える」と本当に嬉しそつだったから。

「お父さんと顔合わせたくないの。」

「でも、中学生が帰って来なかったら心配するって。」

「…いいよ、そのくらい。一人で頭冷やして欲しいから。」

「後ですげー怒られるんじゃないの?」

「いいてば。…新一は…迷惑?」

上目遣いに睨んだ瞳に涙が浮かんでいる。

ここまで頑なになつてしまつと、きつと此処から無理やり追い出して家には帰らない。

「…わーったよ。でも電話はしろよ。」

「…うん。」

渋々承知した蘭は、受話器をとった。

父親は外出中なのか留守電らしく「今日は友達の家泊まる」とだけメッセージを吹き込んでいる。

場所を伝えないのはせめてもの反抗なんだと思う。

しばらく背中を見せたまま突っ立っていた彼女は、振り向いた時にはいつもの笑顔だった。

突然何か吹っ切れた様に、声のトーンも元通りになっている。

「新一！今日は朝まで遊べちゃうね！初めてじゃない？」

「え？あー…蘭が寝なきゃな。」

「寝ないもん！楽しみだね。」

蘭が楽しそうなのはいいけど…微妙に複雑な気分だ。

（本当に何にも意識してねえ…）

「へ？何か言った？」

「…なんでもねーよ。」

一方通行だから。そんなの分かりきってた。

「でね…園子はC組の男の子がカッコいいって、いつも話してて…」

時刻は0時を過ぎている。

眠くなるどころか余計元気になった様にすら見える蘭は、相変わらず笑顔で会話を続けている。

内容は大半が友達の恋愛話。

オレは他人の恋愛に興味なんて無かったから、少しウンザリしている。

かなり無意識に言葉にしてしまった。

「蘭は学校に好きな奴いねーのかよ？」

「へ？」

(……………あ。)

発した後すぐに後悔した。そんなの別に聞きたくない。

居るって言われたらどうすんだよ？
いや、居た方がいいんじゃないか？

答えの出ない問題がぐるぐる回る。

「…や、やだ。居るわけないじゃない！」

顔を真っ赤にした蘭は、両手を大きく振りながら全力で否定した。

その姿は逆に言えば思いつきり肯定してる。

「き…急に何言い出すのよ？新一のばか。」

(こつこつという時に分かりやすい性格って…)

凶器以外の何物でもない。

彼女が否定すればする程、心臓に突き立てられたものが傷口を抉る様な気がした。

…オレはともかく。

それならそれでいい。蘭の為には良い事だし…

なんて冷静に頭で考えながら、自分でも分かるくらいに機嫌が悪くなっていく。

でも絶対知られたくない。

「…蘭にも好きな奴とか居るんだ。」

「だから居ないってば!」

「オメー分かりやす過ぎなんだよ。嘘も下手だし。」

「そ、そんな事ないもん。」

「認めろって。」

「…ど、どうしたの?何か怖いよ?」

…ダメだ。

何かイライラしてくる。

まあ仕方ないよな…

学校に行けば色々な奴と知り合うんだし、いつまでもガキみてーに遊んでばっか居られない。

いつかそうなるんじゃないかって覚悟はしてたんだ。

オレは彼女の『幼馴染み』で『親友』なんだから。

「どんな奴?」

「…し、新一になんか教えない!」

「”幼馴染み”として心配してやってんだよ。」

蘭は俯いて黙った。

しばらくすると真っ赤になった顔を上げ、オレの正面に向き合って座り直した。

何となくオレまで身構えてしまう。

「…し、新一の言う通り。居るよ、ほんとは…好きな、ひと。」

(……自分で聞いた癖に。やっぱり聞きたくなかったな……)

オレが”ふつう”だったら迷わず蘭に気持ちを伝えたいし、他の奴になんか絶対渡したくないのに。

でも、それは出来ない。

今までどうしても言えなくて、これから先も伝える気なんか無い。

彼女を繋ぐ枷は、あの約束だけで充分重過ぎる。

「その人…意地悪だけど優しいの。素直じゃないけど…本当は可愛
いところもある人だよ。」

「…はあ？何だよそれ。ただの強がりじゃねえか。」

「うん、そうかも。でも…辛い事や苦しい事があっても、絶対に他^ひ

人には見せないの。それって本当に優しくして強いつて事だよな？」

「…どーだかな。」

「私は、もつと彼に弱い所も見せて欲しいんだけど…私じゃ頼りないのかな。」

蘭が”そいつ”をどれだけ好きなのかなんて、顔を見れば分かってしまう。

それくらいに優しくして、寂しげな笑みを浮かべていた。

(マジで聞くんじゃないかな…)

思わず視線を逸らした。

目が覚めた時からずっと一緒に居て、この世界で存在を認めてくれたのは蘭しか居なかった。

最初は誰でもいいから傍に居て欲しいと思ったし、もしかしたら蘭じゃなくても『幼馴染』や『親友』として心は許せたのかも知れない。

それは否定しない。

…だけど、違う。

今まで自分が彼女をどれだけ想っていたか思い知らされる。

「…本当に好きなら、伝えた方がいいと思うぜ？」

「……………え？」

「伝えたくても伝えられない奴だって居るんだし。」

「それって…どんな？」

…普通それ聞くのかよ？

思わず本音を言いそうになって、慌てて取り繕った。

「んなの色々あるだろ。言いたくても言えない、めんどくせー理由がある奴はいくらでも居るんだよ。」

「…そうかもしれないけど…」

「だから頑張れよ。…応援、してやつから。」

「…うん。わかった…」

…有り得ない。

応援なんか出来る訳ない。

だけど蘭が幸せなら、一人になったっていい。

今まで充分過ぎるくらいに楽しかった。それが特別だったんだ。全てが在るべき状態に戻るだけ。

(なのに、どうしてこんなイラつくんだ…)

油断したら本音を言ってしまうそうだった。

これ以上彼女が近くに居たら離したくなる。

冷静になれない自分が情けなくて頭を抱えた。

「…新一？」

蘭の声に顔を上げると、何故か彼女が隣に座って覗き込んでいた。少し赤面した彼女が近くて、自分まで体温が上がった気がする。

「…?! な、んだよ？」

「新一は…その…別に何とも思わないんだよね…？」

「え？何を？」

「わ、私が誰かに好き、とか…そうゆうの伝えたりすること。」

(……………は?)

…一瞬、彼女が何を言ってるのか理解出来なかった。

ただその間、蘭をぼーっと眺めていて……。

彼女の表情かおや、仕草。

たぶん目を逸らしたくて仕方ないくらい恥ずかしいのに、精一杯見つめてくる瞳。

「嫌だとか、思ったり…しない、よね？」

彼女の「好きな人」。それが誰だか分かってしまった。

(嘘、だろ…どうすればいいんだよ…)

思考をフル回転させても答えは出ない。

感情で言ってしまったら、きっと後悔する。

だけど、彼女を他の男になんて渡したくない。
本当はずっと傍に居て欲しい。

なら、伝える………？言ってしまったえばたったの二文字の、その言葉を。

また、増やすのか？
守る事すら出来ない約束ちかいを。

…やっぱり、言えない。

なのに蘭を引き寄せていた。

「……………ごめんな、蘭。」

「どして謝るの…？」

耳元で聞こえる蘭の声は、少しだけ震えていた。
彼女の華奢な体は凄く熱くて、どれだけ懸命に想いを伝えようとしてくれたかがよく分かる。

「……………すぎ。だいすぎ…新一。」

それなのに、どうしても答えられなくて。
代わりに強く抱き締めた。

「彼女の為に」駄目だって分かっているのに離したくない。
「自分の為に」離したくないくせに、たった一言が言えない、なんて。

都合がいいように、綺麗事ばっかだな。

矛盾してる。

……最低だ。

9 (彼と彼女の相違)

頭では理解しているはずだった。

彼の本心じゃなくて、きっと私の為に”言ってくれた”言葉なんだ
って。

…それでも。

「どっ、して…?」

本当の気持ちを教えてくれないの？

いつも、いつも…

そんなに私は頼りない…？

私なんかじゃ弱音を吐きそうって思ってる…？

全然分かってない。

私一人は弱くても、貴方が居れば強くなれるのに。

先の事なんて考えなくていいから。
” ずっと傍に居て ” って、そう言っていて欲しかった。

溢れ落ちる雫が世界を滲ませていく。

こころが離れる事が、こんなに苦しいなんて知らなかった。

9 (彼と彼女の相違)

『久しぶり！ほんまに電話くれたんやね！』

「久しぶり、和葉ちゃん。」

『蘭ちゃん、風邪？鼻声やで？』

「大丈夫…ありがとう。…ちょっとお願いがあっただろ…」

家に帰る気分にはなれなかった。

新一の家を飛び出してから、どれくらい経っただろう。

すっかり陽の落ちた公園のベンチは冷たく冷え切っている。

晴れ渡った夜空は星がよく見えて、余計に胸が締め付けられた。

いつからだろう。

私は空を見上げるのが癖になっていた。

その度いつも、彼を想って…

”いつか一緒に本物の空を見よう”

あの約束がある限り、繋がっていられると信じてた。

やっと止まった涙が、またじわり、と滲む。

『お願いって?』

「…あのね、…」

「聞きたいの。新一の本音。」

「…急にどうしたんだよ?」

…ついに聞いてしまった。

聞きたくて仕方なくて、それでも聞きだせずにいた”彼の本当の気持ち”。

緊張のせいか、少し体が震える。

心臓がどきどきして、呼吸が苦しくなる。

最悪の返事が頭を過ぎって、その度「そんな事絶対無い」と頭から振り払った。

…怖い。

怖いけど、まだどこかで信じていた。

「んな怖えー顔すんなよ。」

「…誤魔化さないで。」

あくまで笑顔を崩さない彼。

きつとまた、どうにか曖昧にするつもりに違いなかった。

私も、ほんの少しだけ決意が揺らぎそうになる。

今笑って”冗談だよ”って言ってしまえば、明日からも今まで通り一緒に居られる。

「好き」だなんて言葉で聞けなくても、私が彼を好きだから。

自分が好きな人と一緒に居られたら、それで充分じゃない…？

もし彼の口から一番言って欲しくない言葉を聞いてしまったら…私
はもう笑えない。

だけど…

新一が私の事、本当に想ってるって言うてくれたら…これから先、
何があっても強く居られる。

死ぬまでずっと新一と居たい。新一が望んでくれるなら。

周りの事とか、私の将来とか…そんなの何も考えなくていい！

だから…言うてよ。

「……………」

「答え、られない…?」

新一は気まずそうに目を逸らした。
その仕草に胸が締め付けられる。
彼の表情が見えない。

どうして…?

私はこんなに、新一だけを見てるのに。

胸の中で、どろどろした嫌な感じが渦巻いてる。
…泣きそうになるのを、唇を噛み締めて堪えた。

こんな事言いたくないのに。

「…私しか居なかったから?だから、仕方なく、なの?」

「…蘭、」

「抱き締めてくれるのも、キスしてくれるのも、全部”私の為”？
私が新一を好きだから…？」

「いや…、」

「新一は…誰でも、良かった？私じゃ…なくても……………」

…止められない。

彼にぶつける不安も、流れ落ちる涙も。

言葉を濁す彼に、こんな事を言い放つ自分自身に、イライラする。
たくさんの想いが込み上げてきて、こころの整理が出来ない。

こんな事聞いたって、彼は答えてくれないって知ってるのに。

どうしても怖くて。

心の何処かで、ずっとずっと怖くて。

彼と出逢った日。

彼と約束した日。

彼に「好き」と伝えた日。

彼と一緒に過ごしてきた、今までの日々、全部。

楽しくて仕方なくて、嬉しくて、幸せで…
その分、いつか失うのが怖かった。

新一は私から離れようとしてる。
それに気付いてたから。

「…蘭。」

新一は、きつとこの日を待ってたんだ。
私がいつか不安に耐えられなくなって、こつして弱音を吐く日を。

「…ありがとな。」

だから、彼の答えは。

「オレはお前の事、幸せになんて出来ない、から。」

私だってそれを分かっていたはずなのに…

「…もう、来るなよ。今までほんと…ありがとう。」

彼が選んだのは、お別れの言葉。

それなのに、私達はお互い笑顔だった。

「…優しいね。新一…。」

「…何処が。」

「優し過ぎるよ…」

新一は何も理解してない。

私の”幸せ”は私が決めるものなのに。

私にとって彼が居ない世界なんて有り得ないのに、
自分が居ない方がいいと信じきってる。

彼は今まで、きつと凄く苦しんで、悩んできた。

顔や言葉に出さない新一の、本当の気持ちまでは分かってあげられ
なかつたかも知れないけど…

その彼が出した答えは、彼にとっての唯一の結論。

そう思うと、それ以上何も言えなかつた。

「…ひとつだけ、聞いてもいい…?」

「…ああ。」

「私の事…嫌い、だった? 毎日来るの…面倒だっと思ってた…?」

「…嫌い…なワケ、ねーだろ…」

嘘でもいいから、嫌いって言うてくれればいいのに。

…ほんと…ばか、なんだから。

「約束…解消、しようぜ？」

まるで”あの日”みたい。

二人でお互いの小指を絡めて、誓う。

”あの日”と違うのは、私の頬に伝う涙。

そして『こころ』を繋いだはずの”約束”を、解く為の”誓い”で
あること。

無理矢理繋いだつもりでいたのに。
ずっと繋がって居られると思ったのに。

…やっぱり、

解けた。

100 (シアワセの定理)

変わらない日常。

いつも通りの時間に起きて、学校に着いたら授業を受けて、親友達と他愛ない会話で笑い合う。

空を見上げない様に意識して、常に下を向いて歩いた。

それなのに、どうしても離れてくれないんだろう。

いつもどこかで想ってしまう。

通学路の歩道橋。

学校の渡り廊下。

夕暮れの帰り道。

ふとした瞬間に、胸が締め付けられる。

彼はどこにも居ないのに。

”…逢いたいよ。”

「大丈夫？」

「ごめん…園子。」

4限目の体育の時間。私と蘭はジャージ姿のまま、保健室に居た。顔面でバレーボールを受けた親友の鼻の頭に、絆創膏を貼ってやる。その姿はちょっと情けなくて、でも何だか可愛いらしくて笑えちゃう。

「またボーっとして…どうせ”彼”の事考えてたんでしょ？」

「ち、違うわよ！」

「じゃあ何考えてたの？」

「…今日の夕飯、何作るのかなあって。」

「相変わらず嘘が下手なんだから。そんなんで運動神経抜群の蘭が、こんな怪我するわけないじゃん！」

ちよっと強めに反省を促すと、蘭は肩をすくませて俯いた。

彼女は最近、こんな事ばかり。
階段から足を滑らせて怪我したり、ドアや壁にぶつかったり…
小さなものまで含めれば、もう数え切れないくらい。

「まさに”心此処に在らず”って感じよね…」

「…そう、かもしれない。」

原因は分かっている。

最近聞き出した”彼”のこと。

数日前に「本当に好きなのか聞いて来なきゃ！」と私が言い出したのが全ての始まり。

それが原因で”彼”から別れを告げられてしまったらしく…

蘭は「自分も聞きたかったから園子のせいじゃない」って言うけど、やっぱり私は責任を感じていた。

だから余計に蘭には笑っていて欲しくて。

気付くと落込んで暗い顔をしているから、私は常に明るく振舞った。

「でもさ、今度の休みは例の彼が来るんでしょ？」

「え？ああ…服部君ね。」

「この際、彼に乗り換えちゃえば？彼、中タイケメンじゃない」

「やだ、そんなんじゃないよ！それに服部君には、可愛い幼馴染み

「が居るんだよ？」

「なあんだ、そうなの？電話で呼ぶだけで大阪から来てくれちゃうなんて、てつきり蘭に気があるのかと思ったのに。」

本当は少しマジに期待してたんだけど。

新しい恋をすれば、蘭も元気出るかも知れないって。でも彼女の様子からして…その可能性は無いか。

「…ちよっと、理由があつて。」

言葉を濁した蘭は、その先を言うべきか迷っているみたいだった。俯きがちに視線を泳がすと、何かを決意したように真っ直ぐ私を見つめる。

「…信じてくれないかもしれないけどね。私、本当は探偵なんか出れないの。」

「へ？」

「今まで事件を解決してくれてたのは、全部”彼”。私は彼の推理を、自分の推理の様に話してただけで…それはもう、続けられないから。」

服部君を呼んだのは、その事で…なの。」

「…????ち、ちよっと待ってよ。もし本当にそうなら、今まで何

の為に蘭が探偵やってたわけ？」

「…話すよ、全部。やっぱり園子に隠し事してるの辛いもん。嘘みたいな話だけど…聞いて、くれる…？」

蘭の真剣な表情かおに、私は覚悟を決めた。

彼女がこれから話すことが何であろうと、受け入れるって。

親友、だから。

…そう、思ったけど………

「…ま、待って。頭が混乱してきた。つまり…その”新一君”って…」

全てを聞いてみると、それは想像以上に現実離れしていた。蘭の言葉ひとつひとつが夢物語みたいな話で。

「怖く、ないの…？だって蘭、そういうの一番苦手じゃない！」

「…全然怖くなんかないよ。新一は新一だもん。初めて逢った時か

ら、ずっと…」

普通なら絶対信じられない。

それどころか、この人アタマ大丈夫なわけ？とか騙そうとしてるんじゃないの？とか絶対怪しむ。

でも、蘭はそんな奴じゃない。

私には分かる。彼女は嘘なんかついてない。

頭では理解出来るんだけど…

「やっぱり…信じられない、よね？」

「う、うん…正直言うよね。まだ受け入れるのに時間かかりそうっていつか…」

「…変な事言つてごめん。今の、忘れて…？」

（ あれ？）

この感じ。前にもこんな事があつた様な……

” 何でもない…きょうは留守みたいだね。 ”

ずっと昔、蘭はそう言いながら今みたいに笑った。
…いつだったっけ？

あの時も、凄く悲しそうで…

何でかは分からない。

でもそれが過った瞬間、不思議と私の心は決まった。

「確かに夢みたいな話だけど…でも私、蘭の事は信じてるから。」

「…え？」

「蘭がそう言うなら信じるってコトよ。今まで蘭が私に意味無く嘘
ついた事なんて無いもの！」

「…ほ、ほんとに？信じてくれるの？」

「もちろんよ！それなら”新一君”が蘭に”好き”って言ってく
れないのも納得だしね…」

だったら尚更”彼”には悪い事をしてしまった。

本人にしか理解出来ない理由があったのかも知れないのに…

「でも蘭なら彼の意思を変えられるんじゃないの？それだけ好きな
んだからさ。」

「新一は…強いから。私がどんなに好きで居ても変わらないよ。」

…分かってないんだから。

「馬鹿ねえ。」

「へ？」

「強く見える人の方が本当は脆いのよ。”自分が弱い”って分かってる奴ほど実は強かで世渡り上手、ってね。家柄のせいで色んなトコのお嬢様達に会うけど…そんなもんなのよ？」

あなたには人を変えられるチカラがあるのに。
私だって、その中の一人で…

本人は気づいてないなんてね。

「工藤”…この家かあ。」

古びた外装が威圧感のある”幽霊屋敷”。
噂では聞いてたけど、まさかこんな住宅街にあるなんて予想外だった。

初めて来た…はず、なのに。

(ん…？此処って前に一度…)

来た事があるかもしれない。

確か小学生になるかならないか、くらいの子供の頃。

蘭に連れられて…

何でだった？

肝試し、とか？

…いや、違う…。

(待てよ…確か蘭の彼は”新一君”…。あの時も確か…)

” ねえ園子ちゃん！あたらしい友達ができたから紹介するね！”

” 『 』 っていつの… ”

「 ……！…！ 」

そつだ…蘭は言った。

” 『 』 しんいち 『 』 っていつの… ”

「……………まじ？」

霞がかっていた記憶が晴れると、自然と体が強張った。鳴らそうとしたインターホンの前で指が止まる。

あの時私には誰も見えなかったから、聞いたんだ。

誰と話してるの？って。

そしたら蘭は驚いた顔して、寂しそうに”何でもない”って笑った。

”きょうは留守みたいだね”って…

「…お、面白いじゃん…」

この肌寒い中ブレザーを腕捲りして気合いを入れた。

「お邪魔しまーす…」

運良く鍵は開きっぱなし。

薄暗い玄関。

広くて長い廊下やリビングも人の気配は無い。

(中は綺麗なんだ…かなり広いし。ま、うちには劣るけど。)

無意識に忍び足になる。

誰も居ないらしいのは分かっているけど、勝手に侵入している罪悪感
かも知れない。

階段を昇ると目に入るのは、一つだけ開いた扉。

(わ、凄い数の本…！)

今まで色々な豪邸へ連れて行かれたけど、壁一面の大きな本棚は初
めて見た。

あまりの迫力に思わず足を踏み入れる。

はっとして慌てて見渡しても、もちろん誰も居ない。

ただ、机の上に開いたままの分厚い本が置いてあって…

この家の中で唯一の「気配」を感じた。

「えーっと…」新一君”？…居るの？」

返事なんかあるはずない。

自分の声が虚しく響くだけ。

「…ま、居ると仮定して話すわ。私は鈴木園子。蘭の親友。」

相変わらずしん、と静まり返った部屋。

でも…なんだろう？誰も居ないのに、独り言な気はしない。

不思議な感覚。

「まず、勝手に家に入ったのは謝るわ。けど、開けっぱなしのアンタも悪いのよ？…って、そんな事言いに来たんじゃないけど…」

心に届かなくても、いい。

それでもいいから、ただ、聞いて欲しい。

「新一君”は、間違ってる。」

きつと聞こえている。

何の確信も無いけど…

もしも本当に”あの時”、”彼”が私の目の前に居たんなら。

今が”あの時”と同じなら…

「蘭の幸せは、蘭自身が決める事なのよ。それはいくら長年一緒に居たアンタだって、私にだって決める権利は無いの。

そう言ったら『オレの気持ちなんてお前に理解出来るか!』って、怒るかもしれないけど…」

134

言葉にする度溢れる、大切な親友への思い。

落ち込んだ顔は、あの子には似合わない。

「アンタが普通だろうと普通じゃなかつと、そんなの関係無いわよ。」

ていつか大体ねえ、”普通”って誰を基準に決めるわけ?」

いつもどこか、周りには距離を置かれてた。

遠慮がちに接する表面上だけの”トモダチ”。

私と仲良くすれば得をする、なんて魂胆見え見えのクラスメイト達…

心のどこかで違和感を感じていても、常に沢山の人に囲まれている事に”シアワセ”を感じてた。

独りになりたくなかったから。それが一番怖かった。

だけど蘭に会ってから、そんなの自分に嘘ついて、誤魔化して…目を逸らしていただけだって、思い知った。

「本当は親友として少し不安だけど…蘭が信じてるアンタを私も、信じるから。」

彼女は財閥のお嬢様とか、そんなの関係無く私を一人の人間として見てくれた。

間違っている時は怒って、楽しい時は一緒に笑って。本当の意味での幸せを教えてくれた人。

一番の親友だから。

お願い。

「…蘭の傍に、居てよ。」

それが”新一君”にとってもシアワセな事なら……………」

その人にとって何が幸福で不幸か、なんて自分自身の判断でしか無いんだから。

「”シアワセの定理”なんて、色々なカタチがあったっていいんだからさ……」

まるで、あの頃の自分に言い聞かせてるみたいで涙が溢れた。

11 (いつかの真実)

「…つまり、これは犯人によって意図的に作られた偽物の証拠つちゆーわけや。」

「だ…だとすると犯人は、まさか…」

「こんなん出来る時間あったのは一人だけやで？」

休日を利用して東京まで来てくれた服部君に新一^{かれ}の事を相談するつもりだった。

なのに今私達が居るのは、都内のあるマンションの一室。
そこに居るのは数人の警察と容疑者。

つまり目の前に横たわるのは、もちろん…

(…直視出来ない。)

私は気分が悪くなるのを堪えながら、少し離れた場所に和葉ちゃんと立ち尽くしていた。

「おい、待て!!」

目暮警部が突然発した大声。

「和葉!姉ちゃん連れて逃げろ!!」

「ら、蘭ちゃん!!」

視界に入ったのはナイフを構えた犯人。
追い詰められた物凄い形相で、真っ直ぐに私達の方へ走ってきて

「...え?」

11(いつかの真実)

「いやー、すまなかつたね蘭くん!」

「あはは…」

「ほんまやで！あれ、何て技？めっちゃカッコええやん」

「空手部の先輩に教えて貰った技なの…」

「どない先輩やねん…」

呟いた服部君は呆れ顔。

私も何だか笑うしかない。

本物の犯人相手に空手技を決められる自分自身に驚いた。

偽物とはいえ探偵を続けてる内に度胸がついたのかも知れない…

「それにしても、推理も出来て空手まで強いとなると…もう無敵ね、蘭ちゃん？」

佐藤刑事の言葉にはっとする。

そうだ…この事もはっきりしておかないと。

「あの…目暮警部。」

「どうかしたかね？」

「今度、少しお話する時間をいただけませんか？」

「？構わないが…それじゃ、今日は協力ありがとう。帰りは高木君に送らせよう。」

「あ、お構いなく！駅まで近いんで、歩きますから。」

「そうかい？じゃあ、また。」

気絶した犯人を連行していく目暮警部達を見送り、私達3人はマンションの入り口に取り残された。

「…せっかく東京まで来て貰ったのにゴメンね。解決してくれてありがとう。」

「ああ。それよりオレに相談したい事って…工藤の事か？」

「工藤”って誰？蘭ちゃんの彼氏？」

「え？う、うーんつとね…その…」

「こないだ言った”彼”やる？ちゃうのん？」

「和葉は黙ってるや！」

「何なん？その言い方！」

気がつくともまた喧嘩。

(本当に仲良いなあ、この二人…)

他愛ない事で喧嘩して、気が付くともう仲直りしていて。
私と新一もそんな関係…の、はずだった。

だけど私達の場合は、お互いに口に出れない本心を隠していた。
きつとそれが間違っていたんだ。

「蘭ちゃん！平次みたいだなアホに相談したかて無駄や、無駄！！
相談ならアタシが聞くから、放つて置いて行こ！」

「へ?!」

「何やとオ?!そんなんお前に言われとーないわ！勝手に東京まで
ついて来よつて!!!」

考え事をしてる間にヒートアップしていたらしい。

和葉ちゃんが私の腕を引いて連れて行こうと引っ張る。

「ほら、行こ!?!」

「ええ?!で、でも…!」

服部君と目が合うと、彼はニツと笑いながら小声で呟いた。

「姉ちゃんは和葉と気分転換してるや。どーせ”相談”されてもオンナゴコロなんてオレには分からへんしな。」

「…え？」

「オレは工藤んトコ行ってくるわ。男は男同士、つてな。」

何があつたかは知らんけど、あいつも姉ちゃんには話せない事あるやろし…」

「服部君…」

「あ、それと。」

「和葉は…ボケやけどまあええ奴、やから。」

工藤の事話しても信じると思っで？」

！

それって…

やっぱり服部君は、新一の事知ってるって事だよな…？

「服部君、……！」

「ほな、また後でな！」

…服部君と初めて会った日の違和感は、間違ってたなかったんだ。

彼は何故か新一の家を知っていた。

いや、そもそも何で私に会った後に新一の家に…？

服部君と初めて会った日。

”ご、ごめん新一！すぐ行くから！また後で電話するね！”

”？シンイチ…？”

新一の名前を聞いた彼は、どんな表情かおしてた？
その後すぐに彼は新一の家に行つて…

”じゃあオメー此処に何しに来たんだよ？”

”オレと同じ本物の探偵をこの目で見ておきたかったんや。”

”それに此処は昔…”

彼は……………何を知っているの……………？

「…ちゃん？蘭ちゃん！どないしたん？」

「…あ、ごめん…」

服部君と別れた私達は、和葉ちゃんがずっと行きたかったというカフェに入った。

雑誌で紹介されているお洒落なお店で、可愛いインテリアや北欧雑貨が沢山飾られている。

和葉ちゃんは目を輝かせながらはしゃいでいて…

「この店、関西でも有名なんやで！」

「そうなんだ…このカプチーノも美味しいね！」

「やだ、それカフェラテやん！」

「…え？あ、ホントだ。」

対照的に私は、自分が何を注文したのかすら曖昧だった。

（だめだ…和葉ちゃんに悪いし、しっかりしないと。色々考えるのは後にしよう。）

せつかく東京^{とうきょう}まで来てくれたんだもん。

気を使わせてしまったら申し訳なさ過ぎる。

（笑顔、笑顔…）

「なあ、蘭ちゃん…」

「ん？なに？」

「蘭ちゃんさえ良ければ話して？」彼”と…何かあったんちゃう？」

「え。」

…私って本当に分かりやすいんだな…

和葉ちゃんに、新一との事を全て話した。

すでに園子に話して信じて貰えたという安心感と服部君の”和葉は信じる”という言葉から、落ち着きながら順を追って彼女に説明する事が出来た。

すると和葉ちゃんは予想外の反応で…

「か、和葉ちゃん？」

「はじめ…、辛いのは蘭ちゃん達やのに…」

彼女は泣いてくれた。

新一と別れたあの日から、私は泣くのを辞めた。

想いが涙になって流れ落ちてしまったら、私の中から消えてしまう

気がして。

どんなに泣きそうになっても、堪えた。

ただそれは、予想以上に辛くて。

今まで新一は、沢山辛い思いをしてきたはずなのに…

誰にも弱さを見せないって、涙を見せないってどんなに苦しいんだろう。

その気持ちがやっと少しだけ分かった。

「ありがとう…和葉ちゃん。」

彼女が代わりに泣いてくれたお陰で、私は少し楽になった気がした。私も新一にとってそんな存在になれたらいいのに。

「…蘭ちゃん達、このまま別れてしまったらアカンよ？絶対…」

「…うん。分かっては…いるんだけど。でも、どうしたらいいか分からなくて…」

「簡単やん！」

「…え？」

「蘭ちゃんの気持ち、全部伝えればええんよ！言葉にして、ちゃんと！」

工藤君がどうだろうと、蘭ちゃんは傍に居たいって…そう伝えれば

！」

「…和葉ちゃん…」

「簡単、言つてもそれが難しいんやけど…言葉にせんと伝わらんもん。気持ちつて…」

きつと彼女は服部君の事を想つてるんだろう。

幼馴染つていつも傍に居られる分、一枚の壁を越えるのが難しい。

私だつて新一に気持ちを伝えるのには随分時間がかかった。

もし叶わなかつたら…そう考えると、もう元の関係に戻れない気がして怖かつたから。

でも、そうだよね。

考えてるだけ、想つてるだけじゃ伝わらない。

人間が何の為に言葉を使えるかつて、それは。

きつと好きな人に想いを伝える為だよね。

「和葉ちゃんも気持ち伝えるの？」

「へ?!あ、アタシは平次なんか何とも…!」

「服部君、なんて言つてないよ?私。」

「ら、蘭ちゃんの意地悪!」

二人で大好きな人を想つて笑い合った。

幼馴染の事がずっと好き、なんて、お互いの気持ちは痛いほど分かる。

ありがとう、和葉ちゃん。
少し、勇気出たよ。

「ほんま最初は”平次の東京の女や!”なんて思ったのに…こんなに
に氣イ合っなんて。」

「そうだね！あの時はびっくりしたけど…。
そういえば服部君、”東京初めてじゃない”って言ってたけどよく
来てるの？」

「ううん、最近はこのないだの修学旅行が久々のはずやで？
メッチャ小さい頃に東京行った話はよう聞かされてて、アタシてっ
きりその話の女の子かと…」

「…そう、なんだ？」

何かが心に引っかった。

その中に、何か真実が隠されている様な…

忘れていた大切な何かを思い出させる様な、そんな予感がした。

12 (二人目の来訪者)

朝が来る度増えていたカレンダーの×印の数は、あの日から変わら
ない。

もう誰かの誕生日とかクリスマスだとか関係無いから。

日付の感覚が無くて、今日が何月何日だろうがどうでも良かった。

色褪せ、剥がれかけた青空を見上げながら考える。

もしも自分が消えて無くなる日が来るなら。

それはいつなんだろう。

数十年後…

それとも、数分後なのかもしれない。

ただでさえ不確かな運命ものに、必要とされるものを失った。

だとしたら。

意味なんてあるのか？

ここに存在いきでする事に。

12 (二人目の来訪者)

(…うるせー…)

数秒前から鳴りだした、不快極まりない連続のチャイム音。
たまに『幽霊屋敷』の肝試しとかで子供が悪戯する事があるから、
いつも通り無視していた。

けど、この感じ…

(…完全に遊んでやがる。)

童謡の『七つの子』に合わせたリズムで鳴らされ続けるそれには、
覚えがあった。

どれ位前だったか。でも比較的最近の出来事。
あまりの煩さに思わず玄関を開けた、あの時だ。

『くーどおー!? はよ開けろや! ガキが集まって来よったやんけ!』

『お兄さん、そんなに連打したら壊れちゃいますよ?!』

『いくら幽霊さんでも迷惑だよ!』

『大人気ねえ兄ちゃんだな!』

『うっさいわ! シッ、シッ! 向こう行っとけ!』

窓から見えるのは子供に囲まれた…服部平次あいつだった。

(何やってんだよ…)

追い払いながらも右手はチャイムを鳴らし続けている。
それを冷静に制止している小さな子供達。
端から見ればどっちが子供だか分かったもんじゃない。

放って置いても辞めそうにないので仕方なく玄関の扉を開けた。

「おい、テメーいい加減に…」

「工藤！やつぱ居たんやないか！」

視界に映るのは笑顔の服部。

それとは対照的に、子供達は全員呆気にとられた表情かおをしていた。

「お兄さん？誰と話してるの？」

「く、クドウって…」

「い、今勝手に玄関開きましたよね…？」

視線が集中する。

徐々に恐怖に歪んでいく子供達の顔…

「（あ、やべ…）とにかく入れ！」

「おわ、急に引っ張んな！」

とにかく服部を中へ入れ、扉を勢い良く閉める。
それと同時に聞こえたのは子供の悲鳴だった。

「な、言つたやろ？居るならはよ開けろって。」

「あ、ああ…。」

服部は悲鳴を聞いても何てこと無い顔をして、服についた埃を掃っていた。

こいつとは、この間以前にもどこかで会った事がある。

妙な感覚だった。

けど、それが何かは今も結局分からないままだ。

「あーオレ、コーヒーで。」

「なーよ、んなもん…蘭が置いてってる甘いヤツならあるけど…」

「なら、それでええわ!」

「…自分で淹れる。」

「自分、客に茶ーも出さんのかい!」

(…こいつ、やっぱり…)

文句を言いながら真っ直ぐ台所に向かい、食器が入っている棚も迷わず見つけている。

普通なら家主に聞かなきゃ分かるはずなのに。

「さすがにまた学校行事で来た訳じゃねーんだろ？」

「ああ、あの姉ちゃんに呼ばれてな。」

「…はあ？！何でオメーが蘭に呼ばれんだよ？！」

「んなのオレが知るかいな！」

「ら、蘭は？」

「さっきまで一緒やったけど。」

(…一緒に居た、だあ？！)

「とにかく…この際ハッキリさせたるやないか！」

ニヤリ、と不敵に笑う顔を見て、嫌な予感がした。

ハッキリさせる…？

何を？

…まさか…

「服部、お前…」

「ん？」

「蘭に気があるとかホザク気じゃねえだろっな？」

「…はああ？何でそうなんねん！」

「べ、別にオメーがそう言うなら止めねえけど…」

「…ぶっ…け、けどなんや？」

「あいつは…えーっと…怒りっぱいし。」

あと…恐ろしい程強いし面倒くせーから…や、辞めといた方がいいぜ？」

「…そやなあ。さっきオレも姉ちゃんの空手技見たけど、スカッとしたしなあ。」

「え？」

「それに綺麗やしスタイルええし…ほんまに惚れたりして…」

(…にやるー…！)

ニヤニヤしながら言い放つ目の前の色黒男。
言ってる事とその表情と。

さらには飲んでる物にまでムカついてきた…

「大体てめえ、和葉ちゃんとかいう彼女が居たんじゃねえのかよ！」

「か、和葉ア?! あんな彼女ちゃうわボケ!! 気色悪い事言つな
や!」

蘭から聞いていた服部の幼馴染「和葉ちゃん」。
会った事はないけど、こいつのこの反応…

「へー。でもお前は気があるんだろ?」

「あ、あるワケないやろ!! ただの幼・馴染・染や!!」

(…蘭の事は鎌掛けか。まあもうオレは何か言う権利なんか無いけ
どな…)

服部は軽く咳払いをしながら態勢を立て直している。

「…と、とにかく工藤と姉ちゃんが何あったかは知らんけど。
お前がそない好いてんやつたら、そっちは問題ないやろ。」

「…で、何なんだよ。わざわざまた此処に来た理由。」

「分かってんのやろ?」

さっきまでとは雰囲気が変わった。

しん、と空気が静まり返る。

服部は黙ってオレの返事を待っていた。

「…最初から知ってたんだろ。オレの事…」

「当たり前。」

「…何をハッキリさせるって？」

「お前、ほんまに何も覚えてないんか？」

「ああ。この体になって目が覚める以前の事は記憶が無い。」

自分がどうしてこうなったのか。

何の為に今まで存在して来たのか。

不思議と無理に思い出そうとした事は無かったのに、服部こいつと会ってから変わった。

全てを思い出したら、きつと自分の「存在理由」が分かる。

そんな気がしてた。

「オレは昔、この家まで親に連れてこられたんや。で、そんな時お前にも会った。」

工藤がそないな体になる直前の…あの、瞬間…

オレはお前と一緒に居たんや。それに、あの姉ちゃんも。」

「…それ、蘭の事か？」

あの雨の日以前に、蘭にも会った事がある…？

「いつの、話だ…？」

「…辛いかも知れんけど。その方が、ここからの話しやすいからな。」

他人から見た、当時の自分。

忘れてしまった記憶。

バラバラのピースが集まっていく感覚…。

「く、工藤？」

「……………頭、痛え……………」。

何時^{いつ}だった……………？

服部平次。

服部の両親。

オレの父さんと母さん…

それと……………蘭？

最初の記憶である、あの白い天井を見た雨の日よりも前。

意識を失した^{なく}、瞬間。

彼女はいつも独りだった。

自分と同じ葛藤を抱えているんだと悟った。

初めての親友。

公園とサッカーボール…

長かった雨が止んで、ノイズが晴れる様に。

思い、出した……………。

13 (彼女を守ると決めた日 e p . 1)

「工藤…大丈夫か？」

「…大丈夫、だから。話、続けてくれ…」

服部の言葉が、頭の中でイメージへと変換される。

それは間違いなく眠り続けていた記憶。

思い出す度に酷い頭痛を伴った。

やがて全てが鮮明に映り始める。

普通はそんなガキの頃の記憶なんて覚えてないんだろうけど…

忘れられるはず、なかったんだ。

初めて何かを本気で守りたいと思った、彼女と過ごした数分間を。

「ほら、新ちゃん。平次君に自己紹介してごらん？」

「平次。新一君に挨拶。」

突然訪ねて来たのは同じ年の少年と、その両親だった。印象的だったのは、3人揃っての不思議な語尾とイントネーション。ぼやっただけど”遠くから来たんだな”と思った。

「…オレ、新一。」

「お、オレは平次や！」

お互いに母親の足元に隠れ、少し人見知りしながら交わした挨拶。その後打ち解けるのに時間はかからなかった。

子供の頃から妙に背伸びして、誰に対してもどこか一步距離を置くのが癖になっていたオレにとって、服部は初めて出会うタイプの友達だった。

オレが距離を置こうが何だろうが、そんなの関係なく詰め寄ってくる明るい奴で。

悪く言えば凶々しく、良く言えば気兼ねしなくて、一緒に居ると楽

しかった。

「平蔵さん、大丈夫かしら？お忙しいのに優作に捉まっちゃって…」

「いえ…こちらが先日お世話なつた事ですし。平蔵にとつても、たまの息抜きにええでしょう。」

彼等がこの日此処へ来た理由は、推理小説家であるオレの父親にある。

以前父さんが大阪で工作中、本人曰くたまたま？事件に遭遇して決に一役買った。

父さんが自分から首を突っ込んだんじゃ…という疑惑はさておき。

それがきっかけで大阪府警の平蔵さん（服部の父親）と知り合い、仕事で東京へ来る予定があった彼に、工藤優作のファンという奥さんが息子を連れて無理矢理付いて来た…という訳だ。

「あら、またこのニュース…」

「物騒やなあ…犯人、まだ捕まらんようですね。」

「ええ。狙われるのは小さな女の子ばかりみたいで…」

テレビを眺めながら世間話に花を咲かせる母親達。対照的に室内の遊びに飽きたらしい服部が呟いた。

「なあ、この辺どっか遊べるトコないんか？」

「少し歩けばあるけど…サッカーでもしに行くか？」

「ええな！行こうや。」

「あ、新ちゃん。あんまり遅くならないですよ？平次君、帰りの新幹線の時間あるんだから。」

「わかってるよ。」

家から数分歩いた所には、地元の子供達が集まる公園があった。サッカーボールを手にして辿り着くと、いつもは賑わう広場に人影は無い。

(そういえば今日、仮面ヤイバーの最終回だったっけ？どうりで…)

歳に似合わず流行り物に興味が無かったオレ達は、遠慮なく広場を貸しきって遊ぶ事にした。

サッカーに詳しくないという服部に簡単に説明していると…

遠くから聞こえてきたのは金属が擦れる音。

「あれ？誰かおるな。」

「…ああ、あの子は…」

少し遠くにあるブランコ。独りで俯いたままの少女。それはオレにとっては見慣れた光景だった。いつも此処には先客が居たんだ。

「母さんの友達の子らしくてさ、いつもいるんだよ。」

「ふーん。やけに暗い顔やな。オレらと同じ歳くらいか…」

彼女とは前に一度だけ挨拶を交わした事がある。お互い母親と一緒に居て、ただ「こんにちは」と一言だけ。

本当はその時より前から彼女の事は知っていた。

いつもこの公園で、誰と遊ぶ事も無く独りきりで。

オレも両親の不在が多く、本当に気の合う友達も居なくて、独りでサッカーボールで遊んでいたから。ずっと彼女の存在に気付いていた。

聞かなくても分かったんだ。
彼女は自分と同じだって。

けど何となく話しかけられずに、挨拶した時も初対面のフリをしてしまった。

それから相変わらず話しかける事は出来なくて……………

親友と遊べる時間は、こうしている間にも刻一刻と減っている。服部が彼女に興味を示してやけに焦った事もあり、話題を切り替えた。

「そ、そういえばさ。おまえの言葉って変わってるよな。」

「大阪弁か？カッコええやろ？」

「大阪ってどれくらい遠いんだ？」

「新幹線乗ったら近いで。寝とったらあっちゅー間や！」

「新幹線、て時点で遠そうだな……」

「…まあな。また来たるわ。」

やっと気の合う親友と出会えたのに、陽が沈む頃には帰ってしまう。空はまだ明るいけど、伸びる影が別れの時間が近づいていると告げ

ていた。

いくら近い、と言っても子供には簡単に遊びに行ける距離ではないんだろっ。

「それより、あの子や。」

「…ん？」

「オマエあの子が好きなんやろ？」

「?!な、なにいつてんだよ!」

「さっきわざと話そらしたやろ?オレの目はごまかせ入んで?」

「だ、誰が…べつにオレは…」

「ほー…そうか?なら、オレがあの子と友達になつたろ。」

「ばっ…やめろって!」

「なんでや?好いてないならオマエには関係あらへんやん。」

「か、関係はねーけど…」

あの子は特別なんだ。

下手に話しかけて、もしほんの少しでも傷つけてしまったら。

きつともう二度と、此処へは来ない。

触れたら壊れてしまいそうな、悲しくて繊細な雰囲気纏っていて…。

いつもずっと、たった独り。

好きだとか、そんなのはよく分からないし…そんなんじゃない。

たぶん。

ただ、独りにはしておきたくなかった。

彼女が自分と同じ葛藤を抱えているなら、誰よりも理解出来るから。

本音を言えば友達になりたいけど…

「ん？誰や、あのオッサン…」

服部の声に顔を上げると、あの少女の前に一人の大人が立っていた。黒っぽい長めのコート。立てた襟とマフラー、目深に被られた帽子で顔は見えない。

けど、体格からして服部が言うように男だろう。

「あの子の父親…だと思っか？」

「いや…それにしては何か…」

彼女の反応が変だ。

目の前に立った人物は何か話しかけているのに、笑顔を見せる事もなく、ブランコから降りようと様子もない。
それどころか体を硬直させ、恐怖に怯えて居る様に見えた。

「おい、服部。」

オレ達しか居ない公園。
辺りは少しづつ暗くなり始めている。

…嫌な予感がした。

「…家に戻って父さん達を呼んできてくれねーか？」

「なんでや？アイツが変なオッサンやったら、オレらで捕まえたらええやんか。」

「ばーろ…大人相手にオレ達だけで勝てるかよ。」

「オマエはどうすんねん？」

「ここで様子みてる。」

「…わかった。ひとりでムチャすんなや？」

顔を見合わせて頷き合った。

服部が父さん達を連れて戻って来るまで、たぶん10分はかかるだろう。

(それまであいつが変な事しなければいいけど…)

男に気付かれない様に遠回りし、ブランコの近くにあるベンチの裏に隠れ、様子を伺う。

これも父親のお陰かもしれない。

数々の事件や自身の小説の話を聞いてきたせいで、緊張はしても、頭は冷静で居られた。

「…や、やだあ！」

小さな悲鳴が響いた。

女の子は男に腕を引っ張られ、ブランコから引きずり降ろされそうになっていた。

必死で鎖に掴まっている掌が震えているのが、遠目でも分かる。

(…くそ、どうする…?)

頭を過ぎったのは、母親達の会話。

最近ニュースで報道されていた「少女連続殺人犯」。

その残虐な手口と、被害者に共通点が無い事から愉快犯だとされていた。

有力な目撃情報も無く、犯人は依然として逃走中、だと。

確かニュースでは隣町が主な犯行拠点だと言っていたけど…

まさか、米花町に？

この男がその犯人だとしたら…

だけど不思議と「逃げる」という選択肢は無かった。

あの子を助きたい。

助けられたら、守れたら…今度はちゃんと伝える。

友達になるうって。

もう独りじゃないって…

背も高くて体格の良さそうな大人の男。

子供が真っ向勝負を挑んだって勝てる訳がないなら、方法はただ一つ。

「…あ！ねえ君、蘭ちゃんじゃない？」

「…え？」

男に感づかれない様に、明るい声で少女に話しかけた。
たった今、ただ偶然公園に来て、知り合いに会った子供を装って。

真っ青になりながら涙を溜めた彼女が振り返る。
オレは笑顔を崩さない様に意識して、続けた。

「…その人、お父さん？」

「う、ううん…」

「じゃあ向こうで一緒に遊ぼうぜ？」

強引に彼女の手を取って、男から引き離れた。
その手はガクガク震えていて、安心させるように強く握った。
混乱しながらも抵抗する事無くついて来る彼女を連れながら、男の
様子を探ると…

背筋の凍る様な不気味な視線を感じた。

(…やべえな…)

「あ、あの…もしかして、しんい…」

「…話は後で。走れるか？」

「え？」

怖くなかったと言えは嘘になる。

だけどそれ以上に、ただ彼女を守りたいと思った。

彼女を助けることで自分も救われる気がして。

…助けたかった。

目の前に広がる孤独という恐怖から。

14 (彼女を守ると決めた日 e p . 2)

公園特有である無駄に見晴らしの良い景色が、今は疎ましくて仕方ない。

それでも陽が落ち始めて少し視界が悪くなった事と、子供の特権である小さな体が救いだっただ。

大人が通れない生い茂る木々の間を走り抜け、何とか”あいつ”を撒く事が出来た。

だけど、油断は出来ない。

今はかなり離れているが、”あいつ”はまだオレ達を探している。

しかも選択肢は無かったとはいえ、此処は出口とは逆側。

服部が戻って来るまで、ただ隠れて待つしかなかった。

14 (彼女を守ると決めた日 e p . 2)

(なんとか撒けたのはいいけど…これからどうする…?)

立ち入り禁止の札が掛かる柵の内側で考えていた。

下手に出て行けばすぐに掴まる。

大声を出したって近くに人の気配は無い。

一番厄介なのは、奴が本当に愉快犯である可能性。

見つかるのを覚悟で誰かに助けを求めた所で、その誰かが気付いてくれるまでにオレ達が無傷で居られる保証なんて無い。

殺傷行為そのものを愉しんでいるのなら、捕まる事なんて考えてないのかも知れない。

あの視線は、そう思わせるのに充分だった。

思い出すだけでも寒気がする。

心臓を鷲掴みされた様な嫌悪感で、吐き気すらした。

息を殺して様子を伺うと、ゆらゆらと彷徨っている不気味な黒い塊。全身黒づくめで顔の見えない大男は、まるでこの世のものとは思えない化け物みたいだ。

「…あの…しんいち君、だよな？」

小さな声を震わせながら、彼女が呟いた。

恐怖のせいかな、相変わらず顔色は蒼白のまま。

「あ、ああ。大丈夫？…えっと…蘭、ちゃん。」

「うん…すごく、怖かったけど…助けてくれてありがとう。」

初めて、笑った顔を見た。

こんな状況なのに一瞬見とれてしまっくらいに可愛くて。思わず、繋いでいた手を離れた。

「…友達が、オレの父さん達を呼びに行ってくれてんだ。だからもうすぐ、あいつも捕まるよ。」

「う、うん…」

「それまでここでじっとして、隠れてようぜ。」

大きな木の幹の影に隠れ、得体の知れない存在から逃げながら。初めてのまともな会話だっていうのに…苦笑いするしかないな。

幸い”あいつ”にはまだ気付かれていないらしい。此処には背を向けて見当違いな場所を探している。

「ごめんね…」

「え?」

「あ、ううん。お花、踏んじゃってるから…」

この柵の内側が立ち入り禁止なのは、どうやら綺麗に咲き誇る足元の花達を踏まない様に、らしい。オレは状況が状況なだけに、そんな事気にする余裕すら無かったけど。

「…優しいんだな？」

「わたし、が…？…違うよ。」

蘭はじつと”あいつ”を見つめた。

その表情は怯えながらも、どこか悲しそうだった。

「あのひと…言った。これは復讐なんだって。」

「…え？復讐…？」

「あのひと、昔…大切な人がしんじやっただって。事故、だったみたいだけど…ほんとうは、違う。」

誰かがやっただって言った…それなのに”犯人”は証拠が足りなくて捕まらなかったって。

”犯人”に対する復讐…”最初”はその子供だった、って…」

一言づつ紡がれていく言葉。

普通の子供なら理解出来ないだろう。

オレは父さんの職業柄、彼女の言葉の意味が分かった。
彼女も眩きながら、懸命に自分自身に取り込んでいる様に見える。

「ひとり、ふたり…どんなに数を重ねても、ただむなしくなるだけ。それはわたしの親のせいなんだ、って…わたしの親が”犯人”を逮捕できなかったからだって。だから、わたしで最後にするって言った…それできっと救われるって。」

「…おまえの親、って？」

「お父さんは刑事で、お母さんは弁護士…なの…」

…どつりで、彼女がこの手の話を理解する訳だ。

「それでこれ以上事件が起きないならって思ったんだけど…」

「…なに、言っただよ？おまえ…」

「だって…わたしは独り、だもん…お父さんもお母さんも忙しくて、いつも居ないの。」

お父さんやお母さんの仕事の事で、色んな人から恨まれたり、いじめられたり…

わたしなんて、居ても居なくても一緒なんだよ…？」

大きな瞳から、次々と大粒の涙が溢れ落ちていく。

「そんな事無い」って否定したくても、言えなかった。オレもそう思っていたから。

両親にとって本当にオレは必要な存在なのか、って…

「でも、怖くて…怖くてしかたなかったの。助けてもらった時、すごく嬉しかった。

だからわたし、優しくなんてないよ…」

うずくまって泣きじゃくる彼女に、自分の姿が重なった。

心のどこかでは、本当は分かっているんだ。

父さんも母さんも、すごく大切に思ってくれてる事なんて。

きっと彼女の両親も同じ。

だけど他人の親子を見る度、広い家で独りきりになる度、また疑ってしまう。

もっと一緒に居たいのに、また独りになる。

親の前では平気な顔して。「偉いね」なんて褒めて欲しくて…

でも。

それとこれとは訳が違う。

「ばーろ！んな事言ってんじゃねえよ！」

「…え？」

「どんな理由があつたつて、人が人の命を奪う権利なんてねえんだよ。復讐なんて…絶対に間違つてる。

そんなの自分自身も追い詰めて、周りも傷つけるだけだよ。

おまえが犠牲になつたつてな、結局あいつの心が晴れる訳ねえし、おまえの親だつて苦しむんだぞ?!」

「で、でも…」

「必要としてくれる人が居ない、つて言いたいのか？」

「…う、うん。」

「そんなのおまえが気付いてないだけだろ。」

「…ちがうもん。本当にいないんだもん。」

「いや、意外とどっかにいるかも…」

「だから！そんな人、本当にいないんだつてば…!!」

「…っだ…!!マジで分かつてねーな!!」

(ここに居るっつーのー!)

…とは言えない自分が情けない。

でも少し安心した。

彼女もこうして真正面から誰かに立ち向かえるんだ。

これなら時間はかかっても、きっと両親とも分かり合える。

「……………あ……………」

数秒前まで威勢の良かった蘭の顔が再び青ざめた。

言葉にならない単語を発しながら、震える手でオレの方を指差している。

…しまった。

状況を理解するにつれ、血の気が引いていくのが分かる。

オレのすぐ背後に立っていたのは

「きゃああああ……！」

蘭の悲鳴と同時に、右頬に当てられた冷たい感触。

視線だけ動かして目に入ったそれは、刃の部分に黒い錆があるナイフだった。

あれから、何分経った？

たかが数分程度が、こんなに長く感じるなんてな。

…でも、まだ…

「し、しんいち君…？」

抵抗する術は残ってる…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0973y/>

空の落書き

2011年12月4日01時54分発行